山形県埋蔵文化財センター調査報告書第90集

四ツ塚遺跡

第3次発掘調査報告書

2001

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

四ツ塚遺跡

第３次発掘調査報告書

平成 13 年 3 月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

調査区全景（東上空から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、四ツ塚遺跡の調査成果をまとめたものです。

四ツ塚遺跡は、紅花の里として名高い西村山郡河北町に所在します。河北町は、古くから稲作を主とする農業地域として発展してきましたが、近年では工業団地の造成により、食品加工・機械産業をはじめ、全国一のスリッパ生産に代表される工業面での振興も目立っています。

この度、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴い、工事に先立って四ツ塚遺跡の第３次発掘調査を実施しました。

調査では、古代の竪穴住居跡と、これまでの２次にわたる調査で見つかったものとつながる道路状遺構や溝跡が認められました。遺物の量はわずかでしたが、住居跡から村山地方ではまだ出土例の少ない土師器の堝が見つかりました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　言

1　本書は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に係る「四ツ塚遺跡」の第３次発掘調査報告書である。

2　調査は山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名　　四ツ塚遺跡　　遺跡番号　481
所　在　地　　山形県西村山郡河北町大字吉田字馬場164他
調 査 主 体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター
受 託 期 間　　平成12年４月１日～平成13年３月31日
現 地 調 査　　平成12年６月26日～平成12年７月５日
　　平成12年10月４日～平成12年11月２日
調査担当者　　調査第四課長　　名和　達朗
　　主任調査研究員　　齊藤　主税
　　調 査 研 究 員　　岡部　博　（調査主任）
　　調　　査　　員　　豊野　潤子

4　発掘調査および本書を作成するにあたり、山形県健康福祉部障害福祉課、河北町教育委員会、西村山教育事務所、山形県立救護施設みやま荘等関係機関にご協力いただいた。

5　本書の作成・執筆は、岡部　博、豊野潤子が担当した。編集は須賀井新人、高桑弘美が担当し、全体については名和達朗が監修した。

6　委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測　　株式会社日本テクニカルセンター
理化学試料分析　　パリノ・サーヴェイ株式会社

7　出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＴ…竪穴住居跡　　ＳＢ…掘立柱建物跡　　ＳＫ…土壙

ＳＤ…溝跡　　ＳＥ…井戸跡　　ＳＰ…ピット

ＥＰ…竪穴住居跡の柱穴　　ＥＢ…掘立柱建物跡の柱穴

ＳＸ…性格不明遺構　　ＲＰ…登録土器

2　遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。

3　報告書執筆の基準は下記のとおりである。

（1）　調査概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

（2）　グリッドの南北軸（Ｙ軸）はＮ－４°12′―Ｅを測る。

（3）　遺構実測図は１／20～１／800の縮図で採録し、各々スケールを付した。

（4）　土層観察においては、遺構を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土については算用数字を付して区別した。

（5）　遺構実測図中の遺物実測図は、原則として１／８で採録した。

（6）　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。

（7）　遺物実測図・拓影図・遺物図版１／３で採録し、各挿図にスケールを付した。

（8）　遺物実測図中の土器について、土師器は断面白抜き、須恵器は黒ベタで表示した。

（9）　遺物観察表中において、（　）内数値は図上復元による推計値を示している。

(10)　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に拠った。

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境……2
　2　歴史的環境……2
Ⅲ　遺跡の概観
　1　調査区と基本層序……8
　2　遺構と遺物の分布……8
Ⅳ　検出された遺構
　1　竪穴住居跡……9
　2　溝跡・道路状遺構……11
　3　土壙……15
Ⅴ　出土した遺物……17
Ⅵ　まとめ……20
参考文献……21

報告書抄録……22

付編　「四ツ塚遺跡から出土した骨の同定」……巻末

付図　四ツ塚遺跡遺構配置図（第１次・第２次・第３次）

表

表１　出土遺物観察表……19

挿　図

第１図　遺跡位置図……3
第２図　調査区概要図……4
第３図　遺構配置図……5
第４図　基本層序……7
第５図　ＳＴ22竪穴住居跡……10
第６図　ＳＤ145・147他溝跡……12
第７図　ＳＤ98他溝跡・道路状遺構……13
第８図　ＳＫ28・50他土壙……16
第９図　遺物実測図（１）……18
第10図　遺物実測図（２）……19

図　版

巻頭図版　調査区全景
図版１　四ツ塚遺跡第１～３次調査合成空中写真
図版２　調査状況・作業風景
図版３　遺構検出状況・完掘状況
図版４　ＳＴ22竪穴住居跡
図版５　溝跡検出状況・溝跡土層断面
図版６　溝跡土層断面・道路状遺構土層断面
図版７　土壙検出状況・土壙土層断面
図版８　出土遺物（１）
図版９　出土遺物（２）

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

今回の調査は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴う第３次調査である。

第１・２次調査は、平成10・11年度に今年度調査区域の東側にあたる部分について行われている（第２図・調査区概要図参照）。

山形県教育庁文化財課が、平成12年度の事業予定地と隣接する部分を含めて、平成11年12月に試掘調査を実施し、７カ所の試掘トレンチから溝跡・溝状遺構・土壙・柱穴等の遺構と須恵器甕体部の遺物を検出した。試掘調査結果及び第１・２次調査の状況を基に、関係機関による協議が行われた結果、平成12年度みやま荘改築整備予定地部分について緊急発掘調査を実施することになった。計画当初の調査面積は1,500㎡、調査期間は10月２日から11月10日（以後「本調査」と呼ぶ）である。発掘調査に至るまでの協議等は以下の通りである。

- ◆ 県教育庁文化財課・県埋蔵文化財センターとで、埋蔵文化財発掘調査計画について協議
  第１次（H10／１／23）第２次（H11／１／27）第３次（H12／１／20）
- ◆ 県健康福祉部長より県埋蔵文化財センター理事長あてに、「県救護施設みやま荘改築整備事業実施に伴う地区内の埋蔵文化財調査」の依頼
  第１次（H10／３／12）第２次（H11／３／17）第３次（H12／３／１）
- ◆ 県健康福祉部長と県埋蔵文化財センターとで「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結
  第１次（H10／４／１）第２次（H11／４／１）第３次（H12／４／１）

2　調査の経過

平成12年９月13日、河北町教育委員会において、四ツ塚遺跡に係る遺跡発掘調査の打ち合わせ会を開催し、発掘調査に至る経過報告・調査期間・調査体制・調査の方法・安全対策等が確認された。以下に大まかな作業工程を列記する。

重機による表土除去は、９月26日から10月５日まで７日間行った。10月４日に調査事務所を設置し、業務の安全を確認し合い現地調査を開始した。

重機による表土除去と並行して面整理を行い、さらに、グリッド設定・遺構検出・遺構プランのマーキングなどの作業を行った。調査区の位置・内部の区画などを示すグリッドは、５ｍ×５ｍの大きさで、Ｘ軸は西から東にＡ～Ｕ、Ｙ軸は北から南に１～18として座標を設定し、「Ａ－１」グリッドというように位置を標記した。

なお、事業計画の変更により調査面積が当初から2,000㎡に増え、事業進行との兼ね合いで、調査区の南側200㎡を、６月26日から７月５日まで本調査に先行して調査（以後「先行調査」と呼ぶ）している。さらに本調査において、調査区内の撹乱部分が多いことや遺構数が当初見込みよりも減少することが判明したため、平成12年10月17日に協議を行った結果、調査終了日を11月２日に短縮することになった。その後も遺構検出・遺構精査を繰り返しながら、断面図・平面図等の作成、そして写真撮影を並行して行い、記録作業を進めた。11月１日にはラジコンヘリによる空中撮影・遺構写真実測を行っている。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

四ツ塚遺跡の所在している河北町は、山形県の中央山形盆地の北西部に位置し、東は天童市・東根市、北は村山市、西と南は寒河江市に接している。町の中心谷地は、近世初期までの城下町で、奥羽本線開通までは最上川の河港として栄え、紅花の集散地であった。谷地の八幡神社の舞楽は天平以来のものといわれ、県の無形文化財に指定されている。

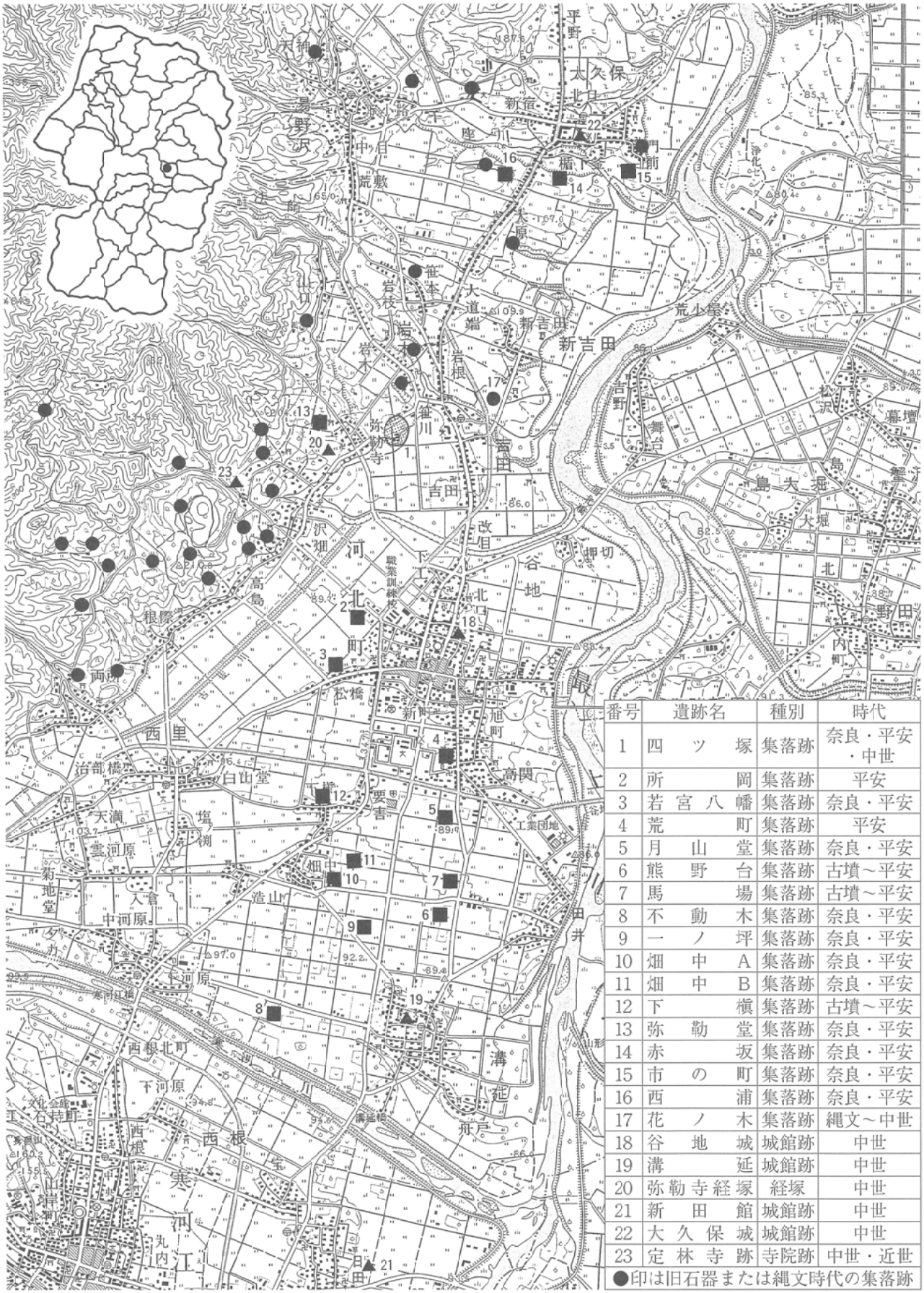
この地区の北西部に葉山火山がある。この葉山の南東方を流下する水系には、法師川・滝ノ沢川・古佐川などがあり、河北町の耕地を潤している。また、寒河江川が町の南縁を区切って北から東に流れ、最上川はその東縁を区切って南から北に流れている。河北町内で出羽丘陵葉山山塊の南東斜面が、南部でおおよそ100mから北へ120m～130mの等高線を形成し、山地と平野部を区分する。町域の70％を占める東部の平野部は、大半が寒河江川の開析扇状地で、北東部の平野部には最上川の自然堤防や氾濫原が広がる。また、葉山山塊から平野部に南東流する滝ノ沢川が下沢畑から高島地区まで扇状地をつくり、その北部の山麓線と100mの等高線に挟まれた傾斜地域は、同じく南東流する法師川が扇状地をなしたもので、沢畑以北の集落はその扇端部に立地する。四ツ塚遺跡は、法師川扇状地内にあり、その川の右岸にあって山麓寄りに位置し、標高は約100mで南東方に向かって緩やかに傾斜している。この地区の地質分布は、平野部を見るに、礫・砂・粘土などが層をなし肥沃な耕地となっている。これら沖積世の土層は湖成層であって、地下には泥炭層を伴う場合が多い。

2　歴史的環境

旧石器時代のものとしては、法師森・奥土入（おくどにゅう）・根際山神（ねぎわやまがみ）などの遺跡がある。縄文時代遺跡は、前期は後沢・長慶寺原・奥土入、中期はお月山・慶光寺山Ａ・権現森など、後期は奥土入・長慶寺原、晩期は花ノ木など多くの遺跡があり、いずれも集落跡で、そのほとんどが東部の平野部に臨む丘陵と山麓に分布する。また、それらは中小河川の河岸段丘に位置する。弥生時代の遺物としては、縄文中・晩期からの遺物も発見され現在も調査が進められている花ノ木遺跡から石刀・石庖丁・偏平片刃石斧などが出土している。

古墳時代以降の遺跡のほとんどが、平野部に広がる。遺跡の層は全町的にきわめて厚いといえる。その古墳時代の遺跡は、西里・下槙・桑ガ原などがあり、奈良時代の集落跡がお月山・一の坪・不動木（ゆするぎ）、平安時代のものが溝延馬場・月山堂などから発見されている。古墳時代前期から平安時代後期まで継続して営まれた熊野台遺跡もある。熊野台遺跡からは「大刀自」の篦書きのある甕の一部が見つかっている。律令制下では出羽国村山郡に属した。畑中遺跡から「大山郷」と墨書した須恵器坏が出土し、大山郷の所在に迫るものである。また、谷地・溝延の水田面には、広範な条里遺構の分布が確認される（第１図）。

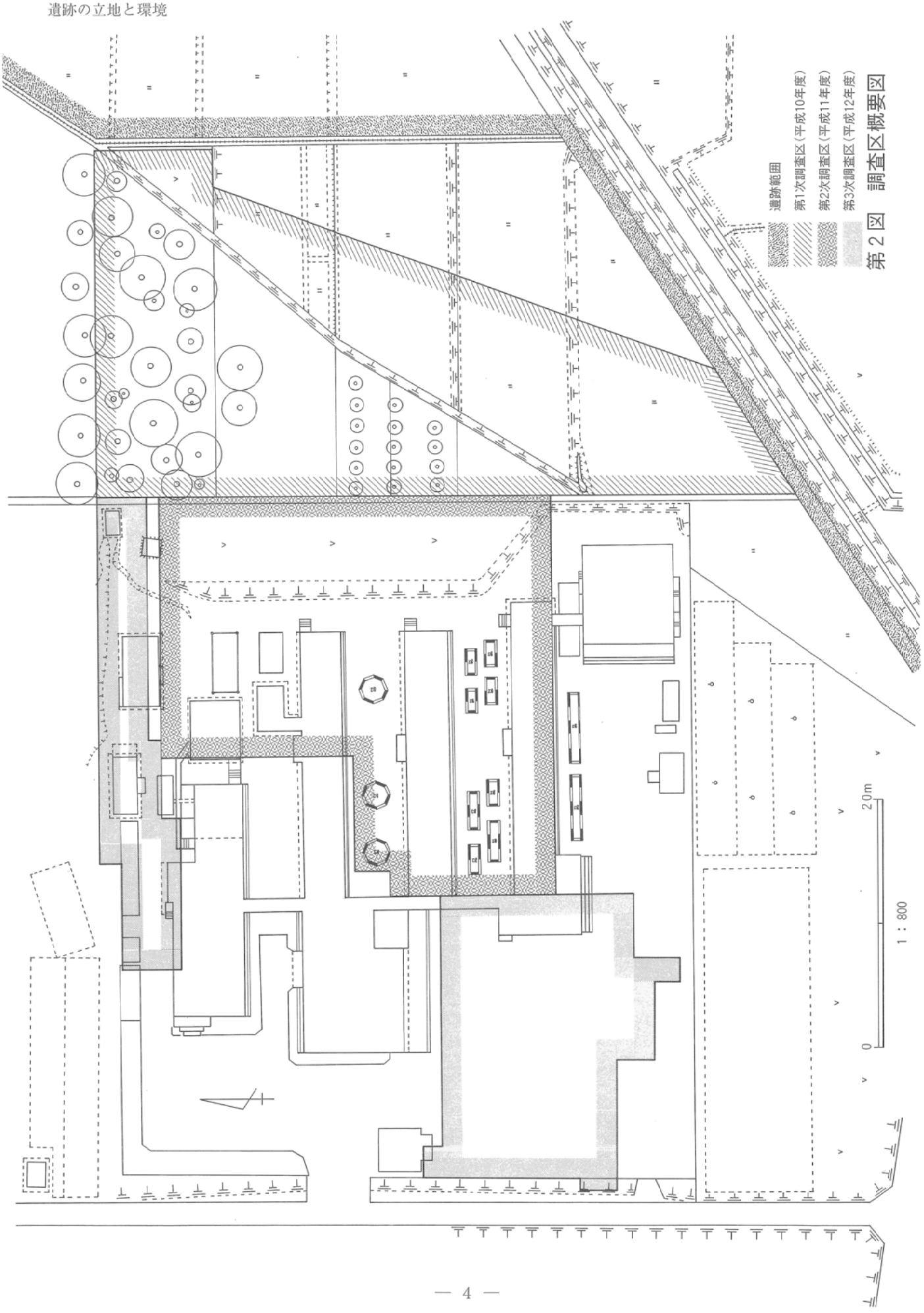
この河北町を含む西村山郡において、奈良時代まで溯る平野山古窯跡が、寒河江市平野山窯跡群である。河北町に隣接する寒河江市の西部丘陵に位置する平野山には、14の窯跡や須恵器ないし瓦の散布地が確認されている。平野山周辺には、柴橋窯跡と長岡窯跡があり、平野山窯跡群に続く時代の10世紀半ばに位置する窯跡が大江町藤田窯跡である。



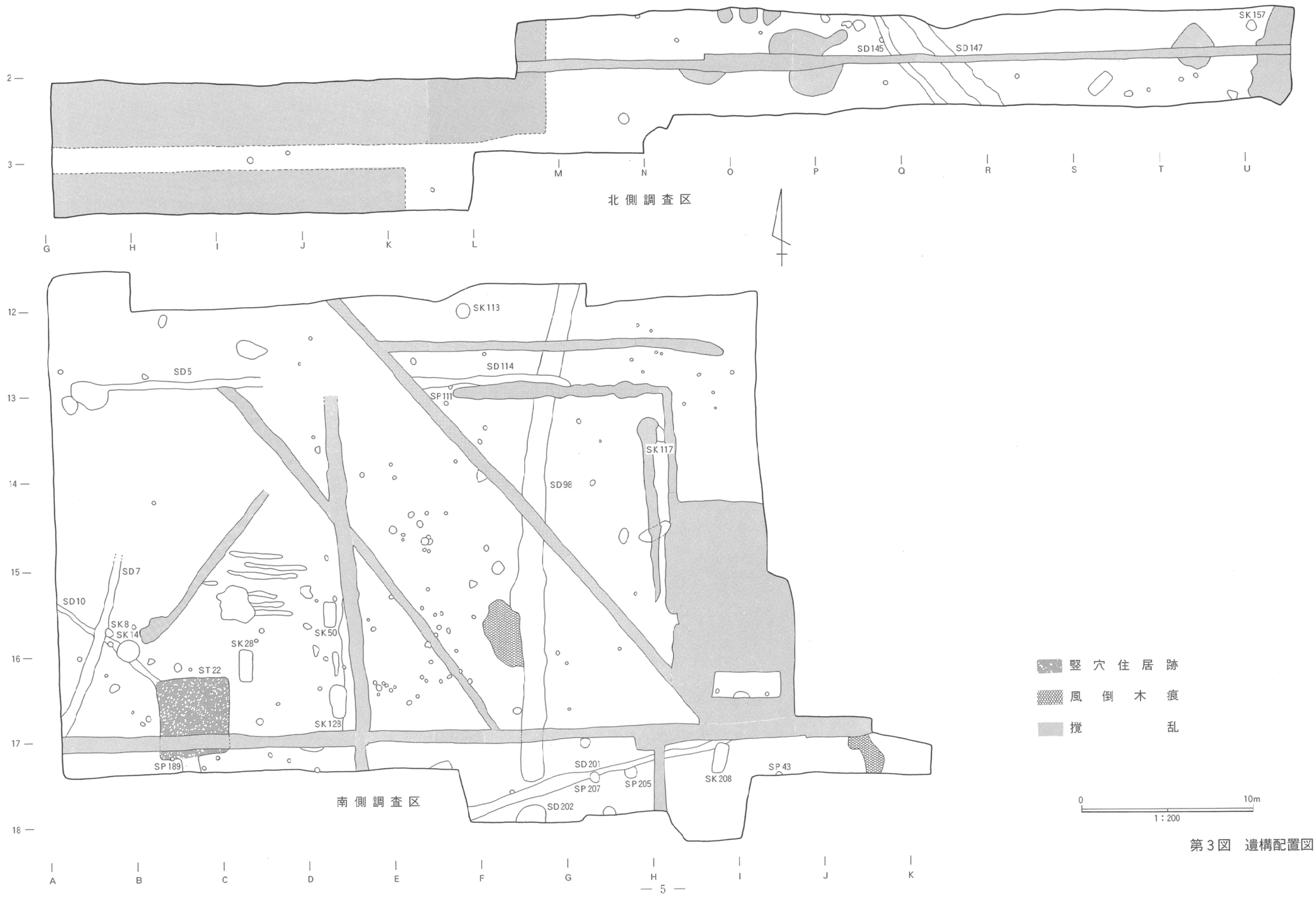
番号	遺跡名	種別	時代
1	四ツ塚	集落跡	奈良・平安・中世
2	所岡	集落跡	平安
3	若宮八幡	集落跡	奈良・平安
4	荒町	集落跡	平安
5	月山堂	集落跡	奈良・平安
6	熊野台	集落跡	古墳～平安
7	馬場	集落跡	古墳～平安
8	不動木	集落跡	奈良・平安
9	一ノ坪	集落跡	奈良・平安
10	畑中A	集落跡	奈良・平安
11	畑中B	集落跡	奈良・平安
12	下槇	集落跡	古墳～平安
13	弥勒堂	集落跡	奈良・平安
14	赤坂	集落跡	奈良・平安
15	市の町	集落跡	奈良・平安
16	西浦	集落跡	奈良・平安
17	花ノ木	集落跡	縄文～中世
18	谷地城	城館跡	中世
19	溝延	城館跡	中世
20	弥勒寺経塚	経塚	中世
21	新田館	城館跡	中世
22	大久保城	城館跡	中世
23	定林寺跡	寺院跡	中世・近世

●印は旧石器または縄文時代の集落跡

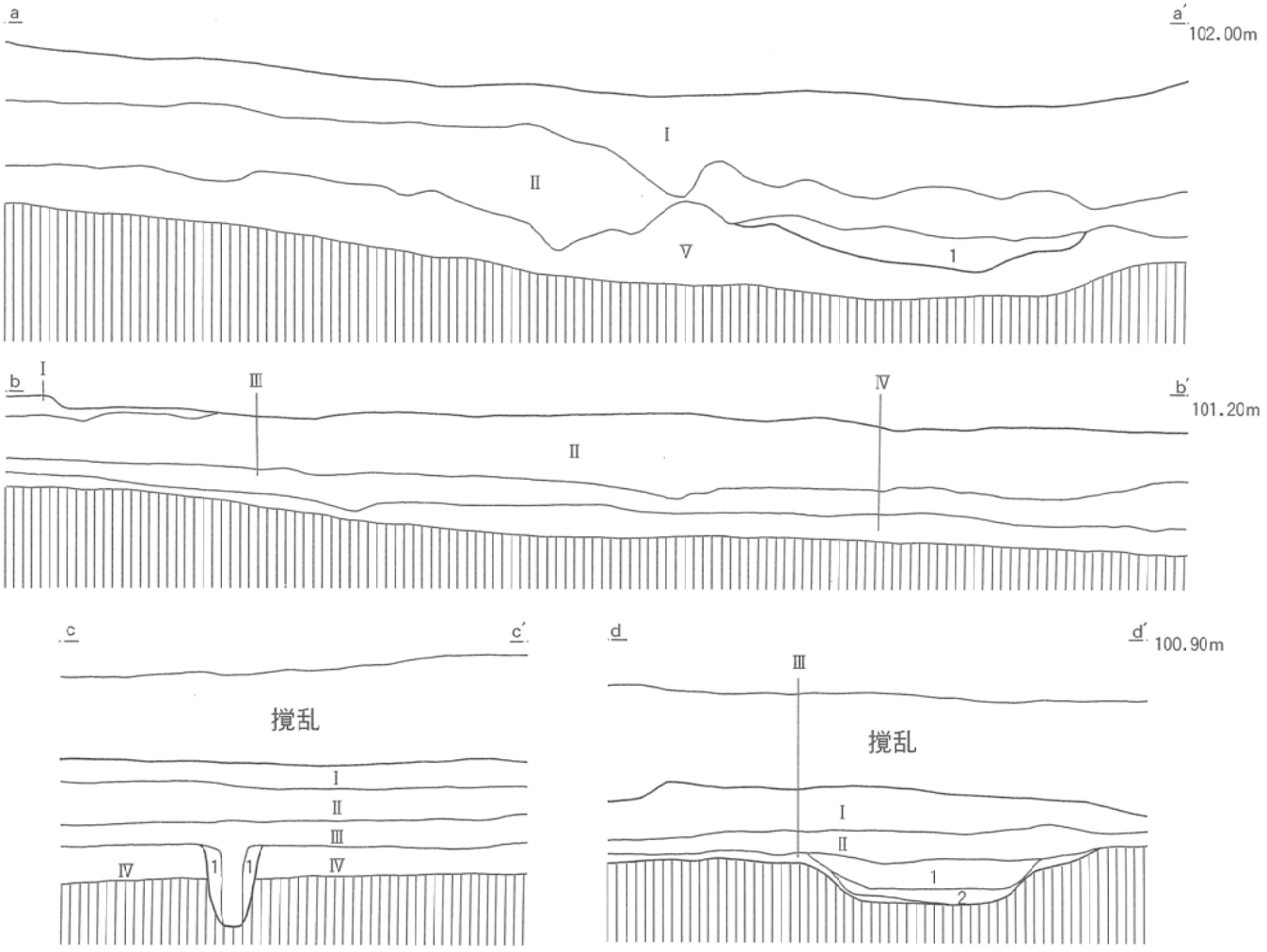
第１図　遺跡位置図(国土地理院発行５万分の１の地形図「楯岡」を使用)



第２図　調査区概要図


SK157
SD145
SD147
北側調査区
SK113
SD114
SD5
SP111
SK117
SD98
SD7
SD10
SK8
SK14
SK28
SK50
ST22
SK123
SP189
SD201
SP207
SP205
SK208
SP43
SD202
南側調査区
竪穴住居跡
風倒木痕
撹乱
0
10m
1:200

第3図　遺構配置図



基本層序（a－a′、b－b′）

Ⅰ	10YR3/1 黒褐色シルト	(小･中風化礫含む)しまっている
Ⅱ	10YR2/3 黒褐色シルト	(小・中風化礫をまばらに含む)
Ⅲ	10YR2/2 黒褐色シルト	(小風化礫少量含む)
Ⅳ	10YR3/4 暗褐色微砂質シルト	(小風化礫含む)
Ⅴ	10YR3/3 暗褐色シルト	(小･中･大風化礫を多量に含む)

SD147

1	10YR2/2 黒褐色シルト	(小・中風化礫を少量含む)

基本層序（c－c′）

Ⅰ	10YR3/2 黒褐色シルト	(小風化礫少量含む)かたくしまる
Ⅱ	7.5YR2/3 極暗褐色シルト	(小風化礫少量含む)
Ⅲ	10YR2/3 黒褐色シルト	(小風化礫少量含む)やわらかい
Ⅳ	10YR3/3 暗褐色シルト	

SP43

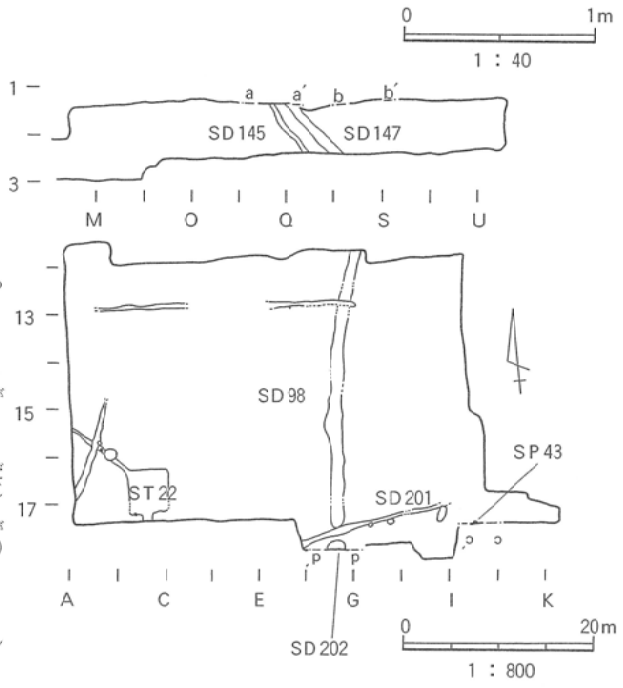
1	10YR3/3 暗褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトがブロックで混じる)

基本層序（d－d′）

Ⅰ	10YR2/2 黒褐色シルト	(7.5YR3/3暗褐色シルトがまだらに、小風化礫・炭化粒少量混じる)
Ⅱ	10YR2/2 黒褐色シルト	(10YR5/3にぶい黄褐色シルトがブロックで､小風化礫少量混じる)
Ⅲ	10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト	

SD202

1	10YR2/2 黒褐色シルト	(小風化礫少量混じる)
2	10YR2/2 黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色粘質シルトがブロックで混じる)



第４図　基本層序

Ⅲ　遺跡の概観

1　調査区と基本層序

四ツ塚遺跡の第１～３次調査の調査区は、遺跡範囲の東南部分に位置する。出羽丘陵の縁辺部にあたり、法師川扇状地の西辺と接し、西から南東に向け緩やかに傾斜している。遺跡範囲の大半は、サクランボなどの果樹園や畑地として利用されるが、南東部は水田となっている。水田部分は、過去の開田及び圃場整備により削平を受けている。今年度の調査区は、山形県立救護施設みやま荘のグランド部分などにあたり施設内にある。

今年度調査区は、北側と南側の２ヶ所に離れている（第２図・調査区概要図）。基本層序（第４図）観察は、その北側調査区のＰ～Ｓ－１グリッド北壁２ヶ所と南側調査区のＦ－17・Ｉ－17グリッド南壁の４カ所で行っている。

ａ－ａ′・ｂ－ｂ′の第Ⅰ層の上は耕作土で撹乱部である。ａ－ａ′において第Ⅴ層上面、ｂ－ｂ′ではⅣ層上面が遺構検出面となっている。ｂ－ｂ′第Ⅳ層は、調査区を覆っている柔らかい黒褐色シルトである。

ｃ－ｃ′・ｄ－ｄ′の第Ⅰ層の上の撹乱部分は施設建設の盛土部分である。ｃ－ｃ′においては第Ⅳ層上面、ｄ－ｄ′では第Ⅲ層上面が遺構検出面になっている。

2　遺構と遺物の分布

遺構は、調査区ほぼ全体に分布する。今年度の第３次発掘調査では、全体で約200基の遺構数を確認している。主な遺構は、竪穴住居跡１棟・溝跡長短合わせて９条、さらに、大小の土壙・ピット・風倒木等を加える。また、第１・２次発掘調査で確認された道路状遺構が今年度の調査でも北側調査区で確認された他、溝跡の延長の可能性が有るものが検出されている。

昨年度の調査区と今年度の調査区の接点が、北側調査区東南縁と南側調査区東縁である。上記の道路状遺構の延長部分が北側調査区で確認されている。今年度調査区内において、解体された建物の基礎部分が遺構検出面下まで入る部分や給排水配管工事による撹乱部があった。特に北側調査区西半部分については、建物の壁部分の基礎が深く入り込んでいたり、通路部分アスファルト工事等で遺構確認面が深く削られ、既存遺構が隔絶して遺構の構成が把握できない部分がある。

竪穴住居跡は、南側調査区の南西部にあたるところで検出された。建物の南側でも排水管設置による削平部分があり、住居跡は分断される。

全体の遺構数の密度は、第１次から第３次へと漸次小さくなり、遺構数(基)／調査面積(㎡)の割合で比べると、第１次は2,000／3,900＝0.51、第２次が1,000／3,600＝0.28、なのに対して、第３次は200／2,000＝0.1である。また、みやま荘敷地内の調査では北西に向かうにしたがって、遺構は希薄となる。

遺物は調査区全域で出土するが、出土遺物総箱数は、整理箱２箱と極めて少ない。竪穴住居跡や溝跡遺構部分から出土した遺物を除くと、表土上や土壙・ピット内・風倒木痕内等覆土内の遺物出土は稀である。遺物構成では、須恵器に比して土師器の割合が高い。

Ⅳ　検出された遺構

1　竪穴住居跡

竪穴住居跡は南側調査区の南西部で１棟(ＳＴ22)検出されている。ＳＴ22は、先行調査の際にその南側部分(約１／３)を検出している。さらにその部分の北半分は排水管設置工事により削平されており、南側部分についても、上部は削られ建物の形状を残すのみとなっていた。その建物の北側部分が秋の本調査によって姿を現し、住居跡の全容が明らかになった。

ＳＴ22（第５図・図版４）

調査区南西部のＢ・Ｃ－16・17グリッドにおいて検出された。ＳＤ10がＳＴ22の北西角を切り、ＳＰ189が南縁を切っている。先行調査によって確認された南側１／３の建物内で壁溝は検出されておらず、北側２／３の遺存状況が良好であった。平面形は、南北に長軸方向をとり4.5m、東西方向に短軸をとり4.2mを測る隅丸長方形の竪穴住居跡である。方位はちょうど磁北を向いている。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは北壁で29～33cm、東壁は20～21cm、南壁３～７cm、西壁25～32cmを測る。南壁は上部が削平されていると思われる。壁溝が本調査で確認された。ほぼ建物を全周するもの考えられるが、南側は定かでない。壁溝の断面はＵ字状を呈する。建物の覆土は３層に分層され、黒褐色シルトを基調とする。

床面は概ね平坦であり、中央から東側と南側に緩やかに傾斜していく。遺構確認面から床面までの深さは、10～16cmを測る。貼床が施されており、床面は固くしまっている。

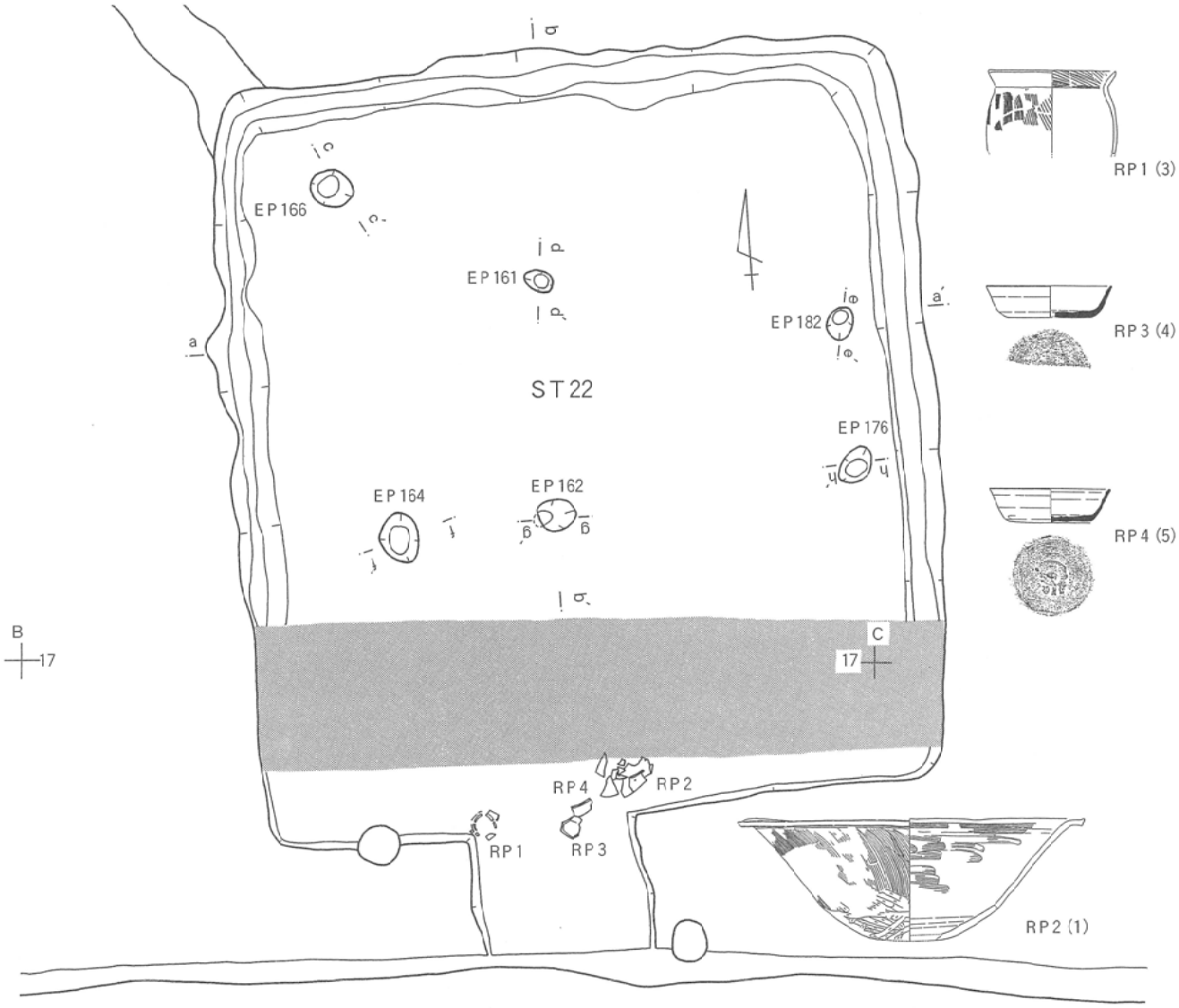
柱穴は西壁側にＥＰ166・164、中央にＥＰ161・162、東壁側にＥＰ176・182と６基検出されている。柱穴の検出はいずれも住居内の床面上で、長径が20～30cmの円形ないし楕円形を呈する。深さは、床面から５～14cmを測る。柱穴の覆土は単一層または２層に分かれており、いずれも黒褐色シルトの覆土を伴う。

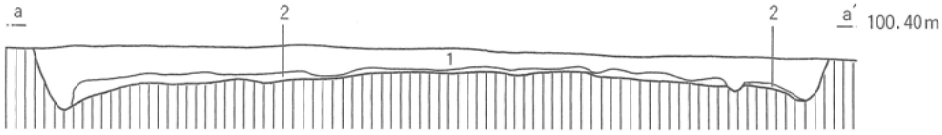
南側中央隅に長軸55cm、短軸45cmを測る楕円形の落ち込みがあり、その上部で堝(２)が出土している。また、南側から幅80cm深さ２cmの溝状の落ち込みが調査区南壁まで続いている。前述の楕円形の落ち込みと共に炉・カマド跡の可能性も否定できないが、楕円形の落ち込みの測にわずかに焼土が確認されたのみで、他に炉・カマド跡の痕跡がなく不明である。

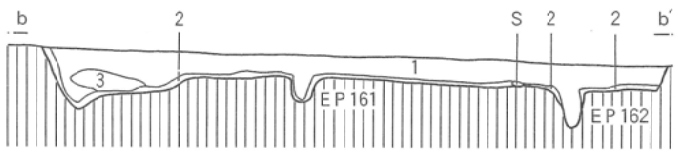
ＳＴ22内出土遺物で図示(第９図)したものは５点で、土師器の甕(２・３)、須恵器の坏(４・５)、堝(１)がある。実測遺物のうち４点(１・３～５)が、ＳＴ22の南側で出土している。須恵器の坏の底部切り離しは２点とも回転ヘラ切りによるもので、土師器の甕は、非ロクロ成形である。堝は、口径が40cmの大堝で、底部は丸底になっている。ＳＴ22では、小片も合わせて85点の遺物が出土している。その８割は土師器である。

本住居は昨年度の調査で確認されているＳＴ365の覆土や出土遺物共に類似しており、同時期・同時代の所産と思われる。

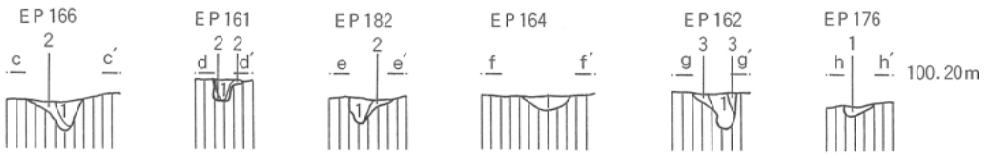
本住居の時期は、出土した土器の観察結果に基づいて、８世紀末・奈良時代の後半と考える。







ST22
1　10YR2/3　黒褐色シルト　(小・中風化礫含む。かたくしまる。)
2　10YR4/4　褐色シルト　(10YR3/3暗褐色シルトがまだらに混じり、小・中風化礫含む。しまっている。)
3　10YR3/3　暗褐色シルト　(10YR4/4褐色シルトがまだらに混じり、小・中風化礫含む。かたくしまる。)



EP166・161・182・164・162・176
1　10YR2/2　黒褐色シルト　(小礫含む。)
2　10YR2/2　黒褐色シルト　(10YR5/4にぶい黄褐色シルトをまだらに混じる。小礫含む。)
3　10YR2/2　黒褐色シルト　(10YR4/4褐色砂質シルトがまだらに混じる。小礫含む。)

0　1m
1：40

第5図　ST22竪穴住居跡

2　溝跡・道路状遺構（第６・７図・図版５・６）

溝跡は、長短合わせて９条検出されている。溝については、切り合いによって新旧関係が分かるものから記述を並べ、関連性がある溝へと掲載する。第１～３次の発掘調査からおおよその時代が推定されるが、今回の第３次調査で検出された溝跡から出土した遺物はほとんどなく、時代を決定する要因は薄い。

ＳＤ７（第６図・図版５）

Ａ－16グリッド・南側調査区南西角を基点とすると、そこからほぼ直線的に北東に延び、Ａ－15グリッドでＳＤ10を切る。そのＳＤ７との交差点から北西へ約５ｍほど進んだ所で、削平され消滅する。総延長は10.3m、幅は45～66cm、深さは確認面から約10cmを測る。北西に走るときの東西の壁は、両壁とも緩やかに立ち上がるが、西壁に比して東壁の立ち上がりがやや急である。覆土は、単一層で黒褐色シルトを基調とする。この溝から遺物の出土はない。

ＳＤ10（第６図・図版５）

Ａ－15グリッド南側調査区西壁から南東へほぼ直線的に延びる。Ａ－15グリッドでＳＤ７に切られ、同グリッドでＳＫ14に切られ、ＳＴ22を切る。南端はＳＴ22で消え不明である。総延長は7.3m、幅は13～25cm、深さは確認面から10cmを測る。南北の壁は、ほぼ緩やかに立ち上がる。底面は大小の礫を含む地山がみられ凹凸がある。覆土単一層で、礫を含む黒褐色シルト基調とする。遺物の出土はない。

ＳＤ98（第６・７図・図版５・６）

Ｆ・Ｇ－11～17グリッドにおいて検出された。溝幅・長さ・深さとも今調査区最大の溝である。南側調査区北壁の（Ｇ－11グリッド）から南方向にほぼ直線的に延びる。南端はＦ－17グリッドにあり、ＳＤ201に切られる様相を呈する（遺構検出面上では未確認）。総延長は30m、幅は100～130cm、深さは確認面から34～63cmを測る。底面は概ねなめらかで、東西の壁ともゆるやかに立ち上がる。西壁が東壁に比して傾斜が緩やかである。覆土は３～４層に分かれ、黒褐色シルトを基調とする。このＳＤ98から須恵器の高台付坏（６）・坏(10)・甕（７～９）が出土している。

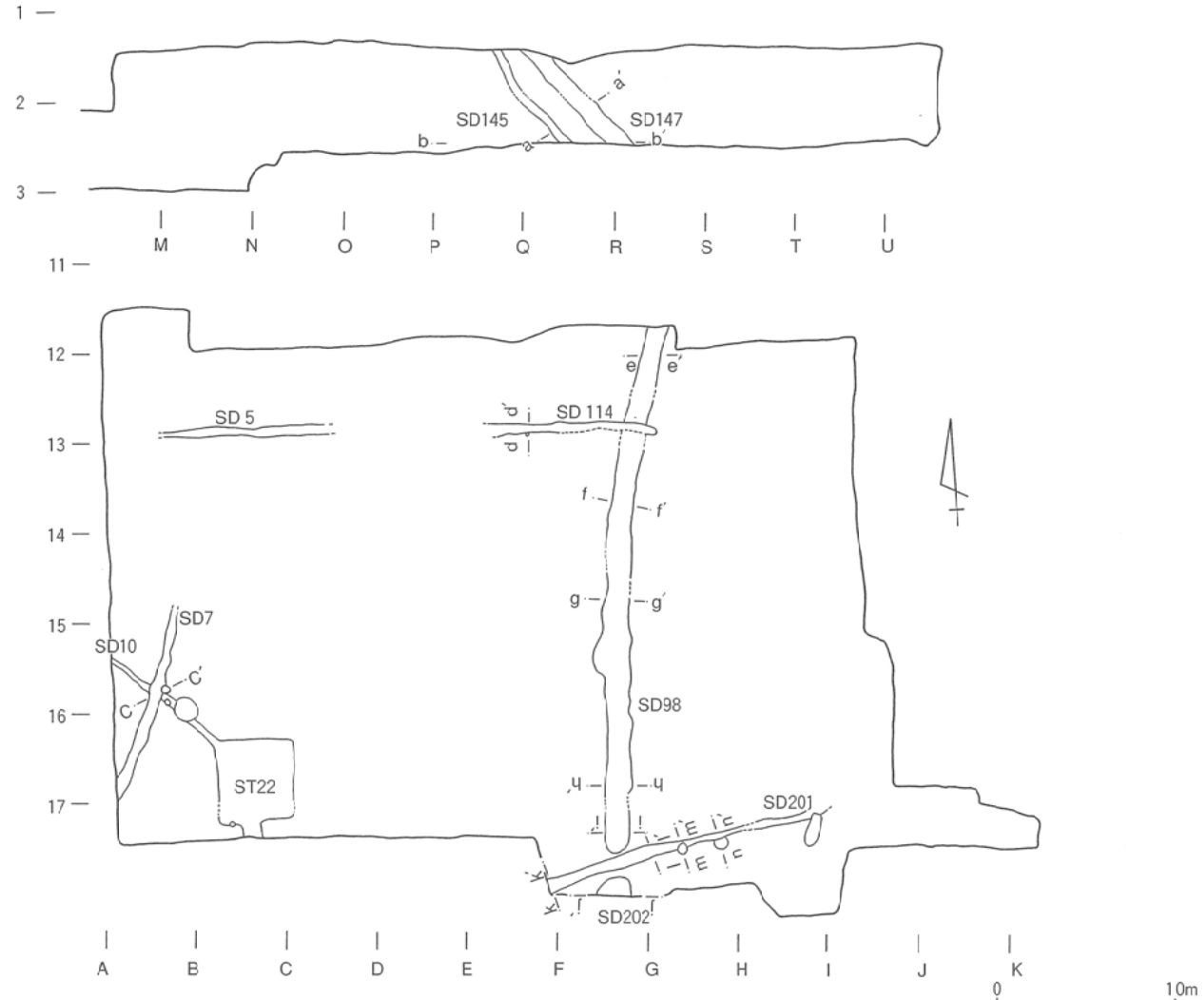
ＳＤ202（第６・７図・図版２・５）

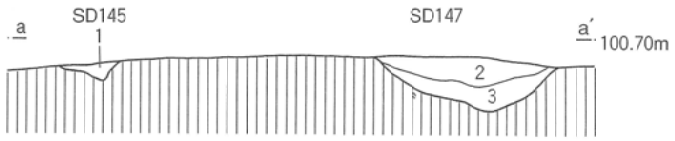
Ｆ－17グリッドで検出された。全容は調査区外へ延び、性格不明遺構（ＳＸ）とも見られる遺構であるが、ＳＤ98と同様の幅・深さ・方向を呈し、覆土もまた類似していることからＳＤ98と関連性が高くまた、調査区外・南方向へ延長が考えられる溝と捉えている。

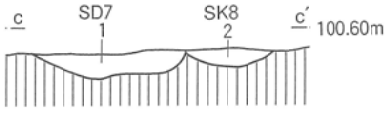
土師器の小片が１つ出土している。

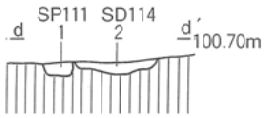
ＳＤ201（第６・７図・図版５・６）

Ｅ～Ｈ－17グリッドで検出された。Ｅ－17グリッドから東北東に直線的に延び、Ｈ－17グリッドで撹乱部分に消える。Ｇ－17グリッドでＳＰ207に切られ（断面ｍ－ｍ′）、同グリッドでＳＰ205を切る（断面ｎ－ｎ′）。また、Ｈ－17グリッドでＳＫ208に切られる。総延長は14.7mで幅は30～80cm、確認面からの深さは、５～40cmを測る。南北両壁の立ち上がりは概ねなだらかであるが、Ｆ－17グリッド部分で深く掘り込まれた部分がある（断面ｌ－ｌ′）。覆土は１～２









SD145
1　10YR2/3　黒褐色シルト　(小・中風化礫含む。)

SD147
2　10YR2/2　黒褐色シルト　(中・大風化礫含む。)
3　10YR2/3　黒褐色シルト　(10YR2/2黒褐色シルトをまだらに、小・中風化礫を含む。)

SD7
1　10YR3/3　暗褐色シルト　(10YR4/4褐色砂質シルトをまだらに、小風化礫・炭化粒含む。かたくしまる。)

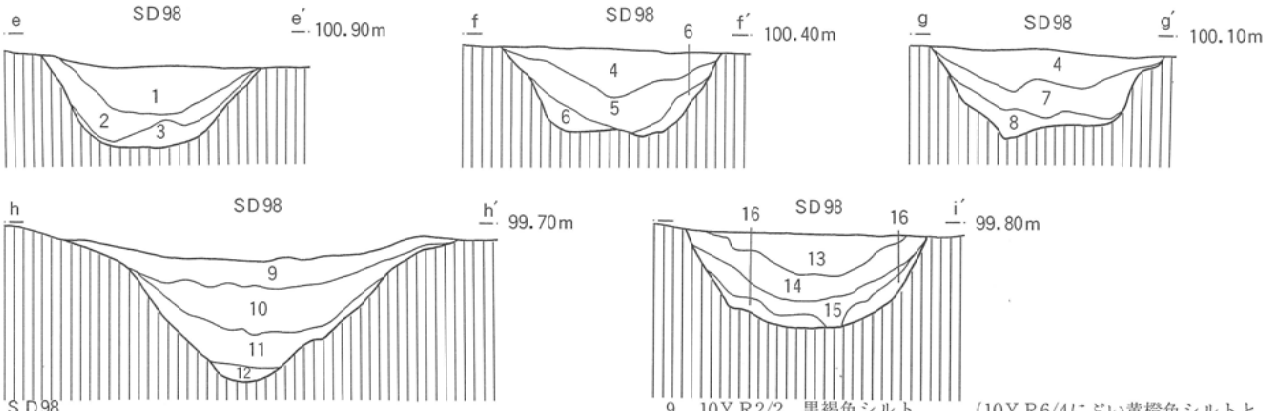
SK8
2　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　(小・中風化礫含む。かたくしまる。)

SP111
1　10YR2/3　黒褐色シルト　(小・中風化礫含む。かたくしまる。)

SD114
2　10YR4/4　褐色砂質シルト　(小風化礫含む。かたくしまる。)

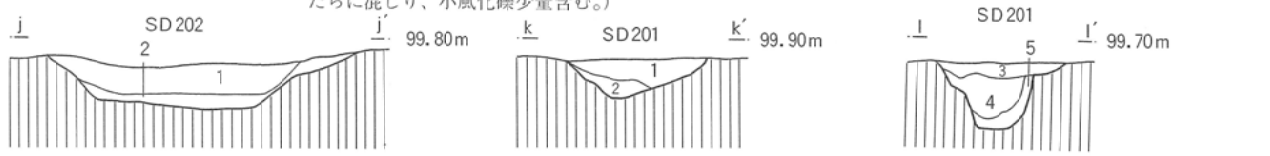
0　1m
1 : 40

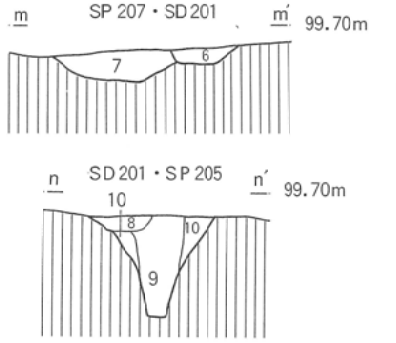
第6図　SD145・147他溝跡



SD98

1	10YR2/2	黒褐色シルト	(10YR4/4褐色シルトがブロックで混じり、小風化礫を含む。やわらかい。)
2	10YR4/4	褐色シルト	(10YR2/2黒褐色シルトがまだらに混じる。)
3	10YR6/6	明暗褐色シルト	(10YR4/4褐色シルトがまだらに混じる。)
4	10YR2/3	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト・小風化礫が点在。)
5	10YR3/2	黒褐色シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色シルト・小風化礫が点在。)
6	10YR2/3	黒褐色シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色シルトがまだらに混じる。)
7	10YR3/2	黒褐色シルト	(10YR5/4にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる。)
8	10YR3/3	黒褐色シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色シルトがまだらに混じり、小風化礫少量含む。)
9	10YR2/2	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトと10YR3/3暗褐色シルトブロックがまだらに混じる。)
10	10YR3/1	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトと10YR2/3黒褐色シルトがまだらに混じる。やわらかい。)
11	10YR2/2	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルト・炭化粒が少量混じる。やわらかい。)
12	10YR2/2	黒褐色シルト	(10YR4/4褐色シルトがまだらに混じる。やわらかい。)
13	10YR2/2	黒褐色シルト	(小風化礫混じる。)
14	10YR2/3	黒褐色シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロックが混じる。)
15	10YR2/2	黒褐色粘質シルト	(小風化礫少量混じる。)
16	10YR6/6	明暗褐色シルト	(10YR2/2黒褐色粘質シルトがブロック状に混じる。)



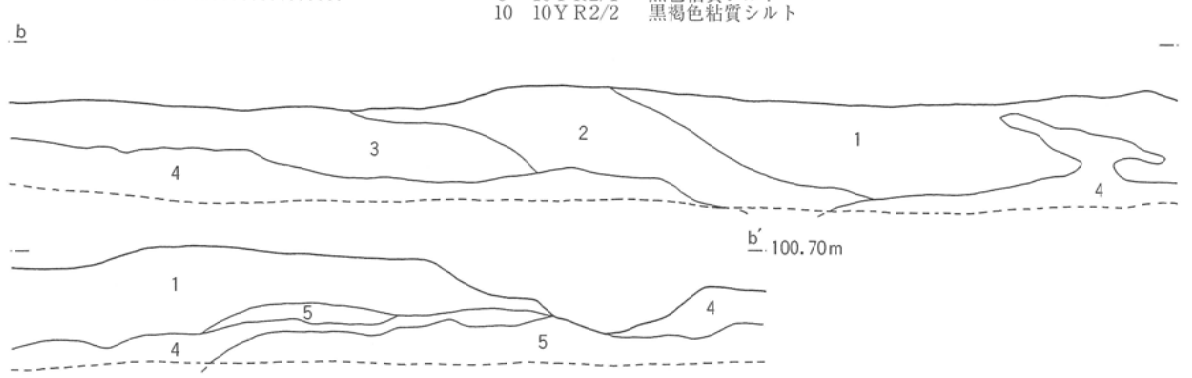


SD202

1	10YR2/1	黒色シルト	(小風化礫少量混じる。)
2	10YR2/2	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色粘質シルトがブロック状に混じる。)

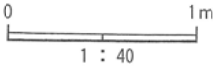
SD201・SP207・SP205

1	10YR2/2	黒褐色シルト	(小風化礫含む。)
2	10YR2/2	黒褐色シルト	(砂・小風化礫含む。)
3	10YR2/3	黒褐色シルト	
4	10YR2/3	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトがブロックで混じり、砂小風化礫含む。)
5	10YR2/2	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄褐色シルトをブロックで含む。)
6	10YR1.7/1	黒色シルト	
7	10YR2/3	黒褐色シルト	(10YR4/3にぶい黄褐色シルトが小ブロックで混じり、小風化礫含む。)
8	10YR2/3	黒褐色シルト	(10YR5/3にぶい黄褐色シルトがまだらに混じり、小風化礫含む。)
9	10YR2/1	黒色粘質シルト	
10	10YR2/2	黒褐色粘質シルト	



道路状遺溝断ち割り部層序（b－b′）

1	10YR2/3	黒褐色シルト	(10YR4/4褐色砂がまだらに混じり、小・中・大風化礫を多量に含む。)
2	10YR4/4	褐色砂	(中風化礫含む。)
3	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質シルト	(10YR4/4褐色砂がまだらに混じり、小・中風化礫を多量に含む。)
4	10YR7/3	にぶい黄橙色粘土	
5	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質シルト	(小・中風化礫少量含む。)



第７図　ＳＤ98他溝跡・道路状遺構

層に分かれ、黒褐色シルトを基調とする。この溝からは、土師器の甕の体部小片が１つ出土している。

道路状遺構（第６・７図・図版５・６）

北側調査区の東にほぼ並行して走る２条の溝跡が検出された。東側にＳＤ147、西側がＳＤ145である。ＳＤ147は、Ｑ－１・２、Ｒ－２グリッドで検出される。Ｑ－１グリッドの北壁から直線的に南東へ延び、東端は北側調査区南の削平部分に消える。総延長6.9m、幅80～120cm、確認面からの深さは14～30cmを測る。東西壁とも概ね緩やかに立ち上がる。覆土は２層に分かれ、黒褐色シルトを基調とする。底面は、大小の礫を含む地山がみられ凹凸がある。

このＳＤ147は、第１～３次発掘調査遺構配置図(付図)より、第１次調査で検出されたＳＤ555、第２次発掘調査のＳＤ959の北西延長上にある溝跡のように思われる。今回第３次調査では、道路状遺構を挟む２条の溝のうち、西側の溝が検出されなかった。第２次調査において道路西側のＳＤ124が向きをやや西に傾け、北端が削平されていることを考えると、第２次調査で検出されたＳＤ124の延長部分は不明である。

道路面の断面を観察すると、ＳＤ147の掘り込みは、基本層序ｂ－ｂ′において第Ⅴ層を掘り込んでいる(第４図)。また、道路状遺構断ち割り部層序ｂ－ｂ′において１～３層は、人為堆積とは考え難く、堆積状況と土層観察からむしろ自然堆積と捉えられる。

出土遺物は、ＳＤ147から須恵器の高台付坏(16)が出土している。

第１次調査では、道路状遺構の両脇を挟む溝としてＳＤ555とＳＤ1002が検出され、さらに、第２次調査の道路遺構を挟む溝ＳＤ959とＳＤ124が検出されている。西側ＳＤ124から15世紀代と思われる青磁の碗(63)が出土している。よってこのＳＤ124に挟まれる部分は、古代から中世まで道として機能或いは再利用された可能性がある。

ＳＤ145（第６・７図・図版５）

Ｐ・Ｑ－２、グリッド、道路状遺構面より検出された。北側調査区北壁Ｐ－１グリッドから南東へほぼ直線的に延びる。総延長6.4m、幅35cm～60cm、深さは確認面から10～15cmを測る。南北の両壁とも緩やかに立ち上がる。底面は大小の礫を含む地山がみられ、凹凸がある。覆土は単一層で、黒褐色シルトを基調としている。第４図の基本層序ｂ－ｂ′の断面に見られるように、道路遺構層を切った掘り込みはない。また、この溝からの遺物の出土もなかった。

その他の溝（ＳＤ114）（第６図・図版５）

Ｇ－12グリッドから検出された。東西に直線的に延びる溝で、東西端は、検出されず不明である。ＳＤ５と繋がる可能性のある溝と思われるが、両溝とも遺物の出土はなく不明である。総延長は2.5m、最大幅20cm、確認面からの深さは10cmを測る。南北壁共緩やかに立ち上がり、覆土は単一層で、黒褐色シルトを基調とする。

3　土壙

土壙は、南北調査区とも検出されている。ＳＫ28・ＳＫ50・ＳＫ128・ＳＫ208は、南側調査区南部で検出した「南北に長く、平面形は隅丸長方形を基調とする」という規格性が窺える土壙群である。

ＳＫ28（第８図・図版７）

Ｃ－16グリッドに位置する。長軸196cm、短軸80cmの隅丸長方形で南北に長い。深さは確認面より46cmを測る。覆土は５層に分かれており、１・２層は黒褐色シルト、３～５層は黒褐色砂質シルトを基調とする。壁は東・西・北壁がほぼ垂直に立ち上がり、南壁はそれらに比して緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で凹凸がない。出土遺物はない。

ＳＫ50（第８図・図版７）

Ｄ－15グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し南北に長い。長軸155cm・短軸73cm、確認面からの深さは25cmを測る。覆土は黒褐色シルトを基調とする単一層である。東・西・北壁は急に立ち上がるが、南壁は緩やかに立ち上がる。底面は中央に浅い窪みがあるもののほぼ平坦である。出土遺物はない。

ＳＫ128（第８図・図版７）

Ｄ－16グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、南北に長い。長軸190cm・短軸80cm、確認面からの深さ30cmを測る。掘方は、北・東・西壁ではほぼ垂直に立ち上がり、南壁はなだらかな傾斜をもって立ち上がっている。覆土は単一層で、黒褐色シルトを基調とする。
出土遺物はない。

ＳＫ208（第８図・図版７）

Ｈ－17グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で南北に長い。長軸175cm・短軸70cm、確認面からの深さ30cmを測る。底面は概ね平坦である。覆土は２層に分けられる。１・２層とも黒褐色シルトを基調とする。２層には炭化粒が点在している。遺物は出土していない。

ＳＫ157（第８図・図版７）

北側調査区、Ｕ－１グリッドに位置する。平面形は円形で、長径66cm・短径61cmを測る。確認面からの深さは20cmで、すり鉢状になだらかに掘り込まれている。覆土は単一層で、黒色シルトを基調とする。覆土内に骨片を確認し分析(付編)にかけた。

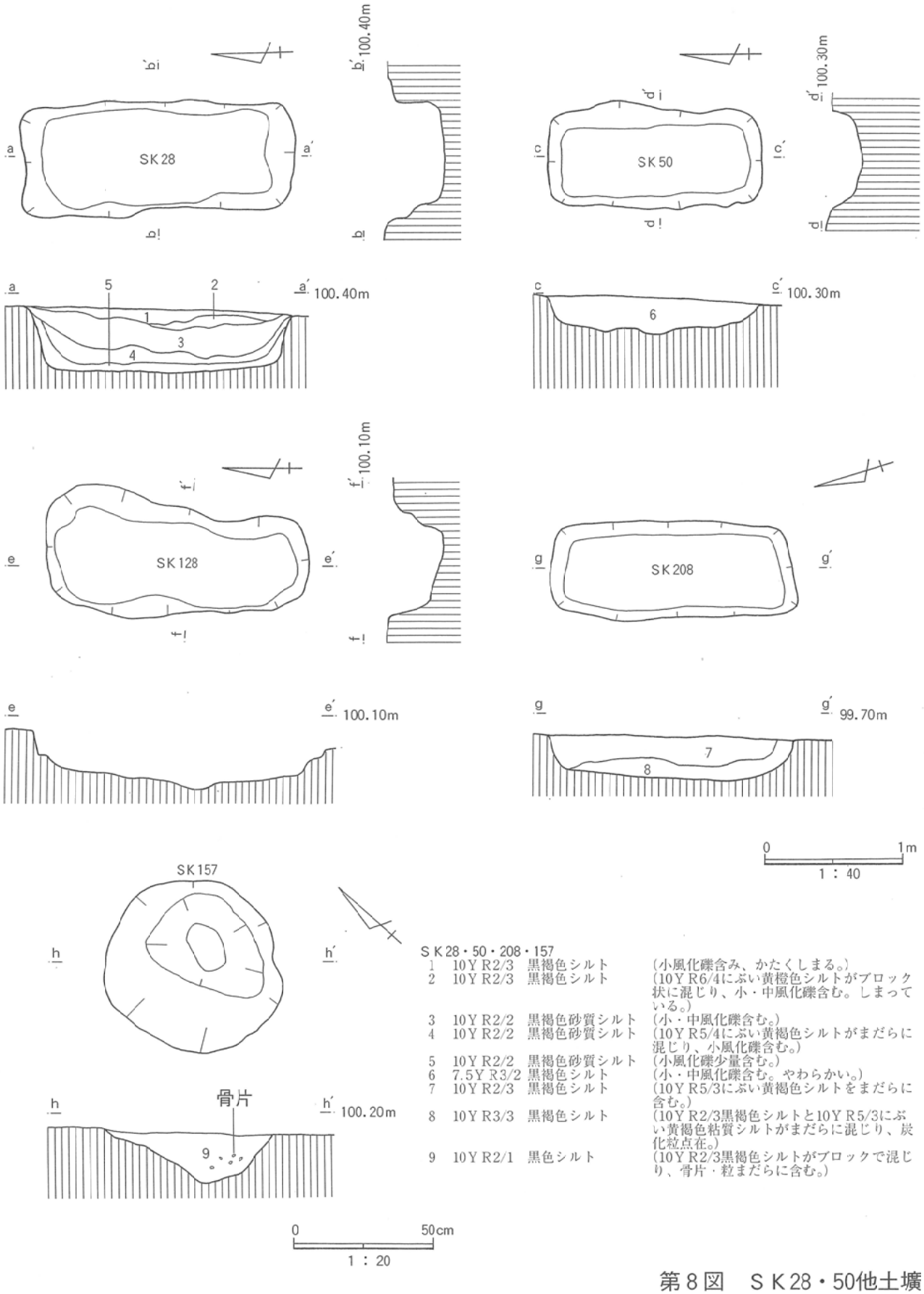
遺物の出土はなく、他の遺構との切り合いもない。

ＳＫ117

南側調査区東部、Ｇ・Ｈ－13グリッドに位置する。東西を撹乱部に挟まれ、平面形は不明である。南北の幅は100cmある。確認面からの深さは10～20cmを測る。覆土は単一層で、暗褐色シルトを基調とし、覆土内から土師器甕の口縁部(14・15)が出土している。

ＳＫ113

南側調査区北部、Ｅ－11・12グリッドに位置する。平面形は円形で、長径87cm、短径80cm、深さ75cmを測る。底面はほぼ平坦な円形をしており、壁が底からほぼ垂直に筒状に立ち上がる。遺物の出土はない。



SK28・50・208・157

1	10YR2/3	黒褐色シルト	(小風化礫含み、かたくしまる。)
2	10YR2/3	黒褐色シルト	(10YR6/4にぶい黄橙色シルトがブロック状に混じり、小・中風化礫含む。しまっている。)
3	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	(小・中風化礫含む。)
4	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	(10YR5/4にぶい黄褐色シルトがまだらに混じり、小風化礫含む。)
5	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	(小風化礫少量含む。)
6	7.5YR3/2	黒褐色シルト	(小・中風化礫含む。やわらかい。)
7	10YR2/3	黒褐色シルト	(10YR5/3にぶい黄褐色シルトをまだらに含む。)
8	10YR3/3	黒褐色シルト	(10YR2/3黒褐色シルトと10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルトがまだらに混じり、炭化粒点在。)
9	10YR2/1	黒色シルト	(10YR2/3黒褐色シルトがブロックで混じり、骨片・粒まだらに含む。)

第8図　SK28・50他土壙

Ⅴ　出土した遺物

今年度の第３次調査で四ツ塚遺跡調査から出土した遺物は、整理箱にして２箱である。面整理時の遺構確認面上で検出されたものは少なく、出土遺物の多くは竪穴住居跡・溝跡・土壙等の遺構に伴う遺物である。遺物出土密度は、第１・２次のそれよりさらに薄くなり、図化できたものは16点である。土器は土師器・須恵器を中心に出土している。以下にそれらを記述する。

１　ＳＴ22出土土器（第９図・図版８・９）

竪穴住居跡の床面または検出面上である程度まとまって出土している。遺物の出土は、東西の中心線より南に偏っている。土師器の堝(１)・甕(２・３)、須恵器の坏(４・５)が出土している。個体数的には須恵器よりも土師器の方の割合が高くなっている。

１の堝は丸底で、口縁部に向かい緩やかな弧を描いて立ち上がり、体部上部は直線的になる。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部が上方につまみ出されている。体部内外面共にハケメ調整、また、丸底の外面にはケズリ調整が施されている。土師器の甕は、口縁部が「く」の字状に外反しているものが中・小２点出土している。２は破片資料である。３は、内外面にハケメ調整が施されている。須恵器の坏で図化できたものが２点である。両方とも須恵器の坏の底部切り離しは回転ヘラ切りである。４の底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整の痕がある。またその内面には火襷の跡が確認された。４は底部から口縁まで直線的に立ち上がり口唇部近くでやや外反する。５は底部から口縁まで直線的な立ち上がりを呈している。

また、須恵器の蓋も小破片で出土している。

２　ＳＤ98出土土器（第９・10図・図版８・９）

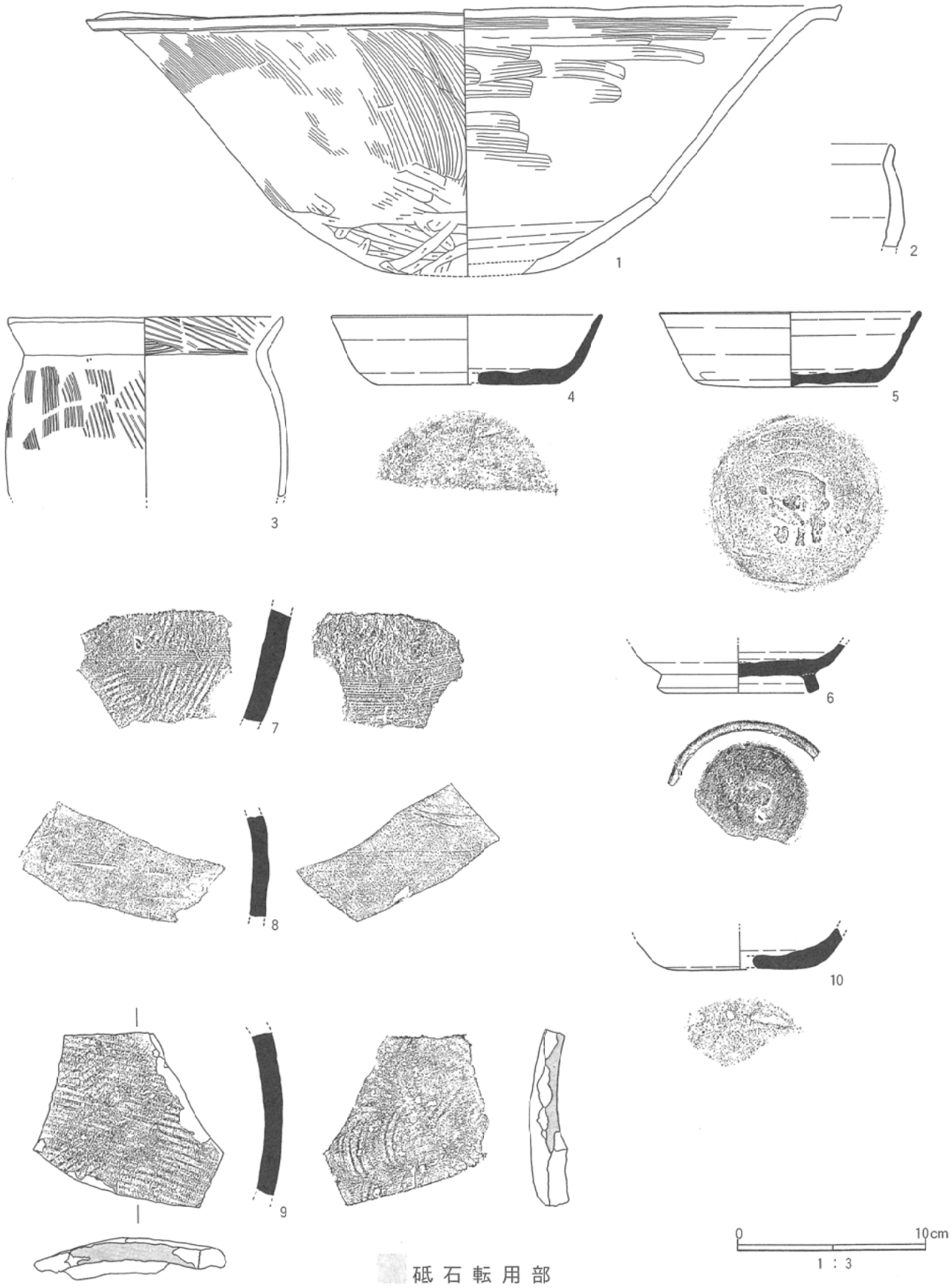
ＳＤ98は、南側調査区を東西に分割するような、幅約１ｍ・総延長30ｍの大溝である。出土した遺物は、器種は須恵器に比して土師器の占める割合が大きくなっている。出土した土器は、土師器の甕(11)、須恵器の高台付坏(６)・坏(10)・甕(７～９)、縄文土器の甕(12)、陶器の鉢(13)である。土師器の甕11は、下半～底部の破片資料である。６の高台付坏の底部切り離しは、回転ヘラ切りである。７～９の資料はいずれも破片資料である。７・９の打圧調整のタタキとアテの組み合わせは、平行タタキと同心円状アテ痕である。９は左と下側面を砥石に転用された痕跡がある。８の資料は外面にケズリが施されているもので、ＳＤ98の直床面から出土している。

縄文土器(12)・陶器(13)は、ＳＤ98遺構確認面上で出土した資料であるが、流れ込みの可能性が考えられる。13には自然釉が確認される。

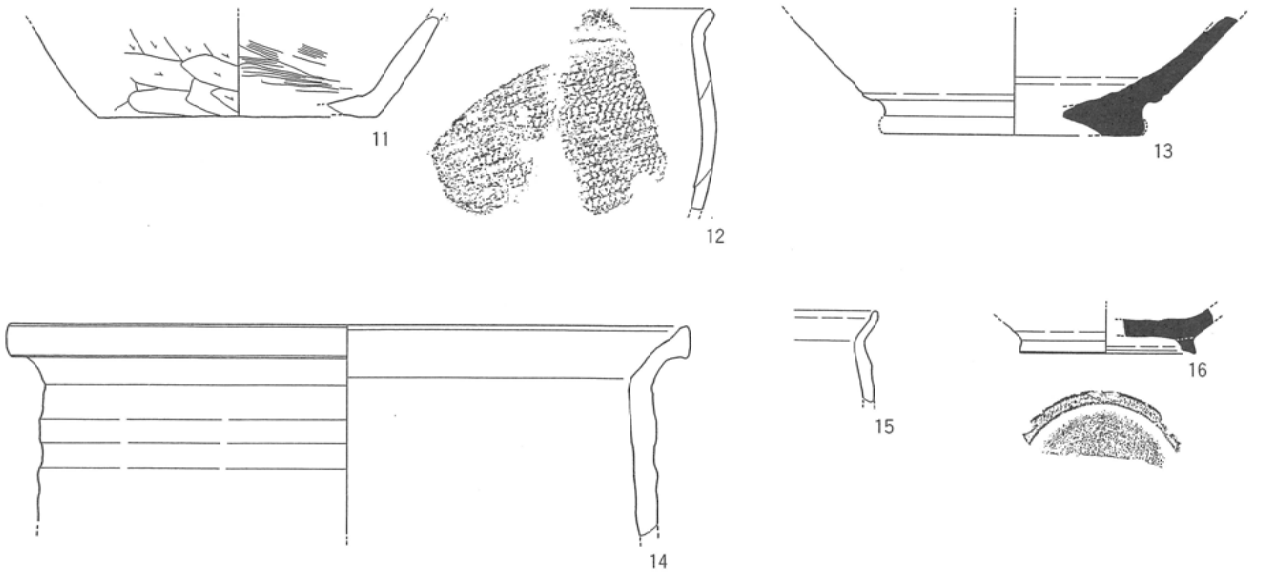
３　その他の出土土器（第10図・図版９）

ＳＫ117から土師器の甕(14・15)が出土している。14は器厚が厚く、口縁部が短く「く」の字状に外反し、口唇部が上につまみ出されている。いずれも口縁部のみで、内外面にロクロ調整の痕がある。

ＳＤ147からは須恵器の高台付坏(16)底部が出土している。底部の切り離しは回転糸切りが確認される。



第９図　遺物実測図（１）



第10図　遺物実測図（２）

出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	器種	器形	出土地点	計測値（mm）				成形			胎土	焼成	色調	備考
					口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部切離				
第9図	1	土師器	堝	ＳＴ22	400		(150)	6	ロクロ・ハケメ ケズリ	ロクロ ハケメ		細砂混	良	橙色	ＲＰ２、約3/4残存
	2		甕					8	ロクロ ハケメ	ロクロ		細砂混	良	にぶい橙色	内面にキズ有
	3				146				ハケメ・ナデ	ハケメ		細砂混	良	浅黄橙色	ＲＰ１
	4	須恵器	坏		(144)	(98)	37	4	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切りナデ	細砂混	良	黄橙色	ＲＰ４、海面骨針混入
	5				138	92	40	3	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	細砂混	良	淡黄色	ＲＰ３、海面骨針混入 内面に火襷痕有
	6		高台付坏	ＳＤ98		(76)		(4)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切りナデ	緻密	良好	灰色	ＲＰ５、海面骨針混入
	7		甕					(9~11)	タタキ ハケメ	アテ ハケメ		緻密	良好	灰白色	ＲＰ６、平行タタキ目 同心円状アテ痕
	8							(8)	ケズリ	ロクロ ケズリ		緻密	良好	黄灰色	直床から出土
	9							(10)	タタキ	アテ		緻密	良好	灰色	側面を砥石に転用
	10		坏			(80)			ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	細砂混	良	淡黄色	
第10図	11	土師器	甕			(110)		(6~8)	ケズリ	ハケメ		細砂混	良	橙色	
	12	縄文土器						5				細砂混	良	褐色	内面に炭付着
	13	陶器	鉢						ケズリ	ロクロ		緻密	良	灰褐色	外面に施釉
	14	土師器	甕	ＳＫ117	(266)			(9~12)	ロクロ	ロクロ		細砂混	良好	浅黄橙色	
	15							5.5	ロクロ	ロクロ		細砂混	良	橙色	
	16	須恵器	高台付坏	ＳＤ147		(70)			ロクロ	ロクロ	回転糸切り	緻密	良	褐灰色	海面骨針混入

Ⅵ　まとめ

今回の調査は、救護施設「山形県立みやま荘」改築整備事業に伴う緊急発掘調査である。第１次調査で3,900㎡、第２次調査が3,600㎡、さらに今年度第３次で2,000㎡が調査対象となった。今年度の調査で一昨年度の調査区と繋がり、四ツ塚遺跡推定面積70,000㎡のうち9,500㎡が発掘されたことになる(付図)。

四ツ塚遺跡は山形盆地の北西部、河北町吉田に所在し、出羽丘陵の山麓一帯の段丘を形成する法師川などの開析扇状地内にあり、その川の右岸にあって山麓よりに位置する。標高は、約100ｍで南東方に向かって緩やかに傾斜している。

第３次発掘調査で検出された主な遺構は、竪穴住居跡１棟、溝跡９条以上、道路状遺構などである。さらに大小の土壙・ピット・風倒木を加え、登録した遺構は200基を越える。出土したおもな遺物は、土師器・須恵器など、整理箱にして２箱である。遺構・遺物は、調査区ほぼ全体に分布する。

第２次調査区と第３次調査区の接点は北側調査区東の南縁と、南側調査区の東縁である。今年度の調査区内において、解体された建物の基礎部分が遺構検出面下まで入る部分が多々あり、特に北側調査区西の部分について削平部分が広がり、構成が把握できない部分があった。

調査区の南西部で、壁溝を伴う竪穴住居跡が検出された(ＳＴ22)。出土した土器の観察結果に基づいて奈良時代に溯る遺構であることが比定でき、出土遺物は、昨年度第２次調査区の西側で検出された竪穴住居跡(ＳＴ365)と類似している。

第３次検出のＳＤ98については、第２次調査で検出されたＳＤ123の延長、または中世の区画溝の役割があるものと考えるが、遺物も断片的であり、中世の確実な遺構も周りにないことから、断定はできない。

溝跡に関しては、第１次調査で中世の区画溝と考えられていたＳＤ1610とＳＤ1603の延長部分が第２次調査でＳＤ312やＳＤ402として検出されている。

道路状遺構を挟む溝跡第１次ＳＤ555・ＳＤ1002、第２次のＳＤ959・ＳＤ124の延長部分として３次ではＳＤ147が検出されている。また３次のＳＤ145は、第２次調査で検出されたＳＤ998の延長部であった。

出土遺物では、ＳＴ22からの出土土器が昨年度のＳＴ365・ＳＢ４周辺遺構等また同じ河北町に所在する不動木遺跡や熊野台遺跡の出土土器の中に散見され、実年代では８世紀半ば以降、奈良時代の後半の土器群として捉えられる。また、「山形県の古代土器編年」(阿部・水戸：1998）によると８世紀第３・４四半期まで溯る土器と考えられる。

第１次調査においては底部回転ヘラ切の坏や８世紀第４四半期と捉えられている稜碗がＳＫ858から出土している。第２次調査では、８世紀第２四半期～第３四半期と捉えられる坏がＳＤ982より出土している。

中世の遺物としては、第１次調査で北宋銭(ＳＴ658)や鉄鏃、第２次調査では15世紀代のものと捉えられる青磁碗(ＳＤ124)が出土している。

ＳＴ22出土土器の中に丸底の堝(１)がある。同じ河北町内の熊野台遺跡からも丸底の堝が出土しているが、今年度出土した事例より口縁部の特徴や体部の立ち上がりの傾斜に違いがみられる。山形県内では丸底の堝の出土例は庄内地方に片寄っており、村山地方における丸底堝(熊野台遺跡：1980・高瀬山Ｋ遺跡：1990等)の出土例は少ない(「山形県埋蔵文化財報告書・山形県埋蔵文化財センター報告書」より)。

第１～３次調査の結果から四ツ塚遺跡は８世紀半ばから９世紀末、さらに中世まで断続的に営まれた集落跡であることが推測される。

〈参考文献〉

佐藤庄一他　：「熊野台遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財報告書第31集
長橋至他　：「不動木遺跡発掘報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第100集1986
佐藤正俊他　：「達磨寺遺跡発掘報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第104集1986
阿部明彦・
水戸弘美　：「山形県の古代土器編年」第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料1998
高橋敏他　：「四ツ塚遺跡発掘報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第70集：1999
岡部　博・
豊野潤子　：「四ツ塚遺跡第２次発掘報告書」
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第74集2000

「山形県埋蔵文化財報告書」
「山形県埋蔵文化財センター調査報告書」
「河北町史上巻」
「西村山郡大堰土地改良区史」1992
「山形県の地名」『日本歴史地名体系６』平凡社1990

報告書抄録

ふりがな	よつづかいせきだい3じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	四ツ塚遺跡第3次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第90集
編著者名	岡部博　豊野潤子
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999−3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号
発行年月日	2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
よつづかいせき 四ツ塚遺跡	やまがたけん 山形県 にしむらやまぐん 西村山郡 かほくちょう 河北町 おおあざよしだ 大字吉田 あざばば 字馬場 164他	6321	481	38度 26分 43秒	140度 18分 49秒	20000626 ～ 20000705 20001004 ～ 20001102	2000	山形県立救護施設みやま荘改築整備事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	奈良・平安	竪穴住居　1 溝　2 土壙　2	須恵器(坏・高台付坏・甕) 土師器(埦・甕)	壁溝を伴う竪穴住居跡が確認され、その建物内で丸底の大埦が出土した。
集落跡	中世	溝　3 土壙　4 道路状遺構　1		墓壙と見られる土壙が4基確認された。1次・2次と同じ道路状遺構の続きが検出された。 (総出土箱数：2)

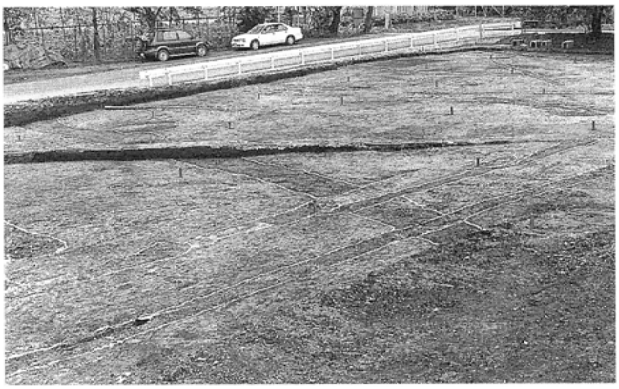
図　　版

第 1 次調査区（下）・第 2 次調査区（中）・第 3 次調査区（上・中右）合成空中写真（右が北）

図版 2

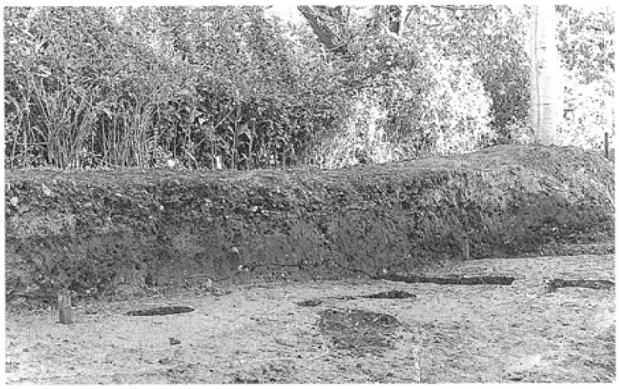
重機による表土除去

面整理

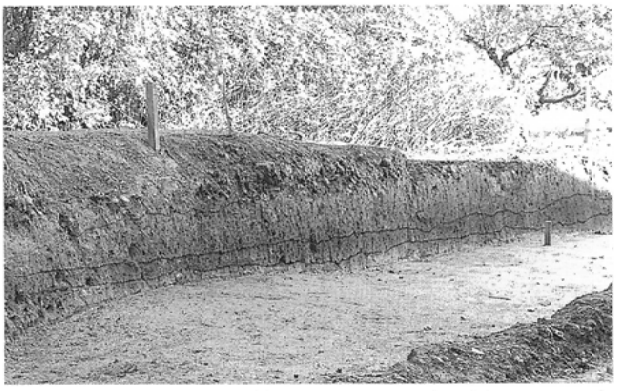


遺構検出状況(北西から)

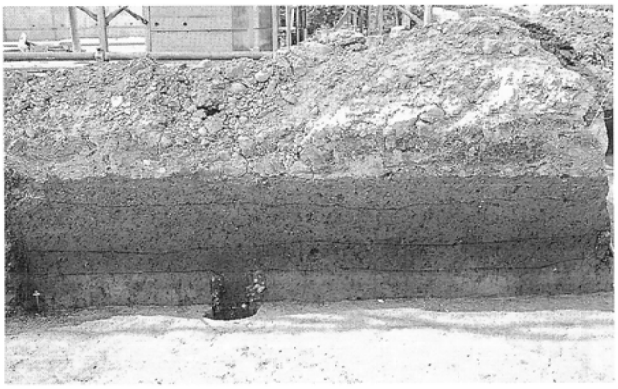
遺構精査



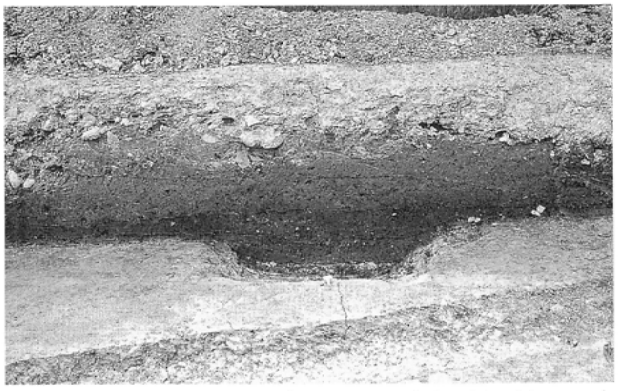
基本層序第４図ａ－ａ′（北西から）



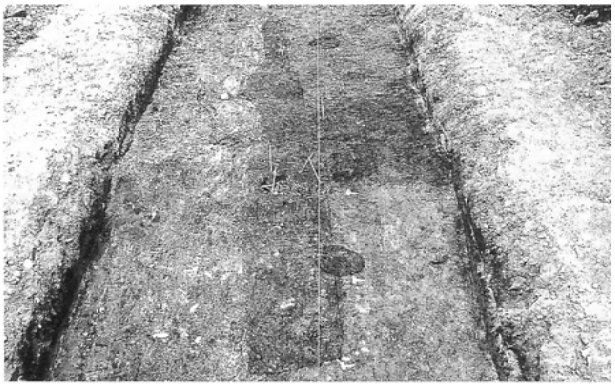
基本層序第４図ｂ－ｂ′（北西から）



基本層序第４図ｃ－ｃ′（北から）



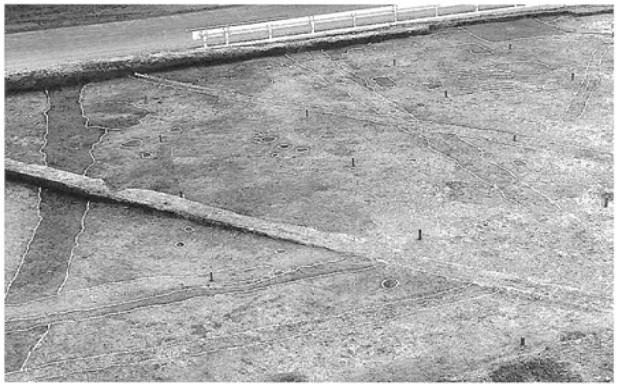
基本層序第４図ｄ－ｄ′・ＳＤ202完掘状況(北から)



調査区南遺構検出状況（ＳＴ22付近）（西から）

調査区南遺構検出状況（ＳＤ98南端付近）（北西から）

北側調査区遺構検出状況（西から）



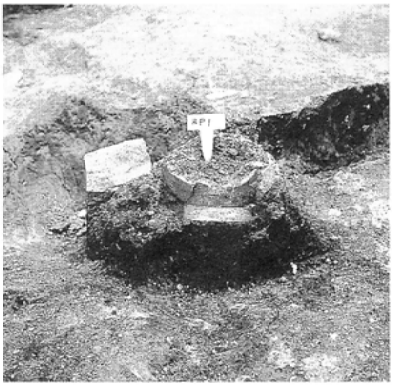
南側調査区遺構検出状況（北東から）

南側調査区完掘状況（東から）

図版 4

ＳＴ22断面第５図ａ－ａ′（北から）

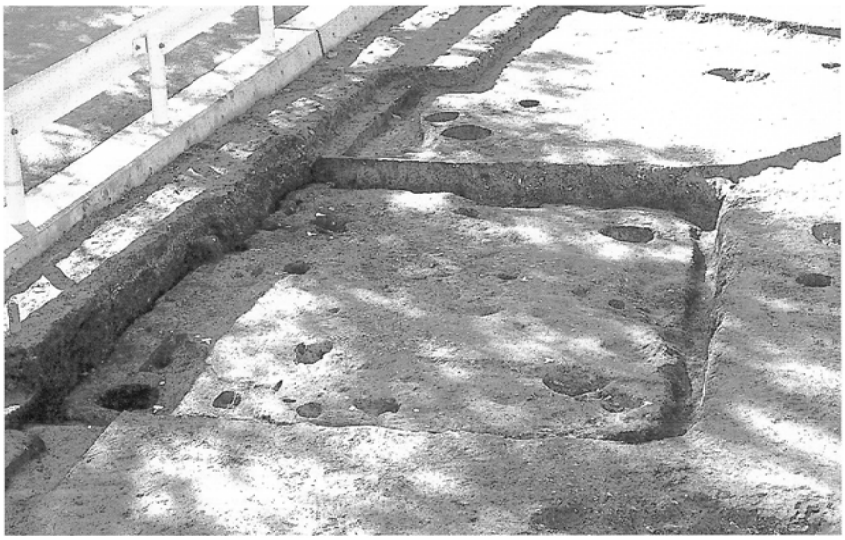
ＳＴ22南遺物出土状況(東から)



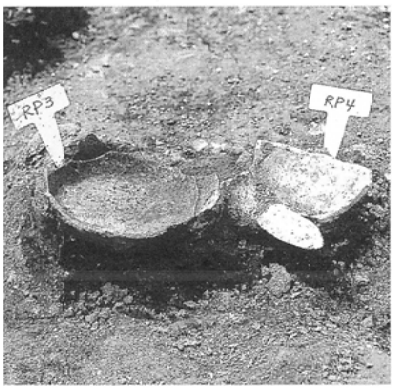
ＲＰ１(３)出土状況(北から)

ＳＴ22断面第５図ｂ－ｂ′（西から）

ＲＰ２(１)出土状況(北から)



ＳＴ22竪穴住居跡完掘状況(東から)

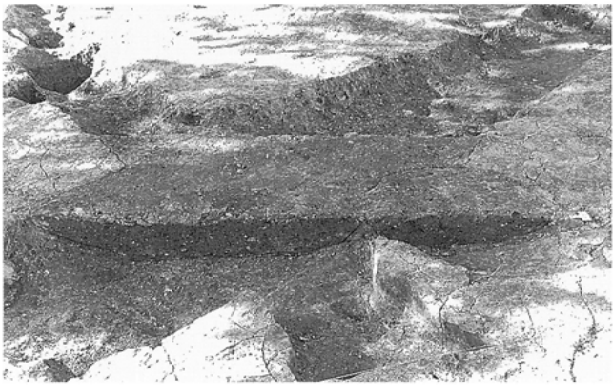


ＲＰ３・４(４・５)出土状況(南東から)

ＳＤ145土層断面第６図ａ－ａ′(南東から)

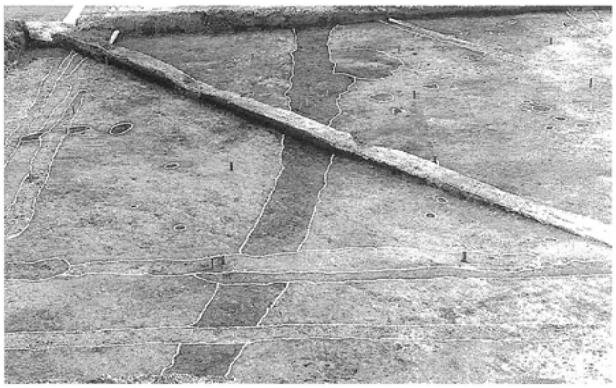
ＳＤ147土層断面第６図ａ－ａ′(南東から)

ＳＤ145・ＳＤ147完掘状況(北西から)

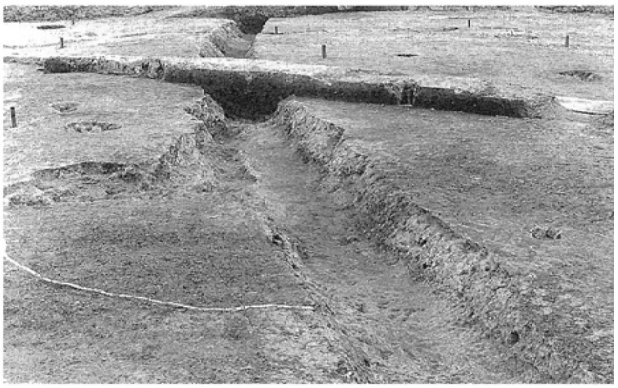


ＳＤ７(ＳＤ10)・ＳＫ８土層断面第６図ｃ－ｃ′(南東から)

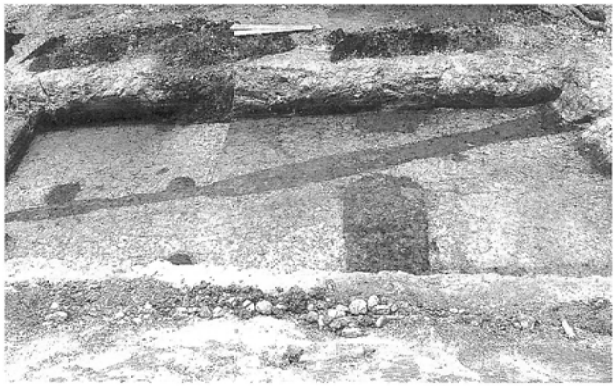
ＳＰ111・ＳＤ114土層断面第６図ｄ－ｄ′(東から)



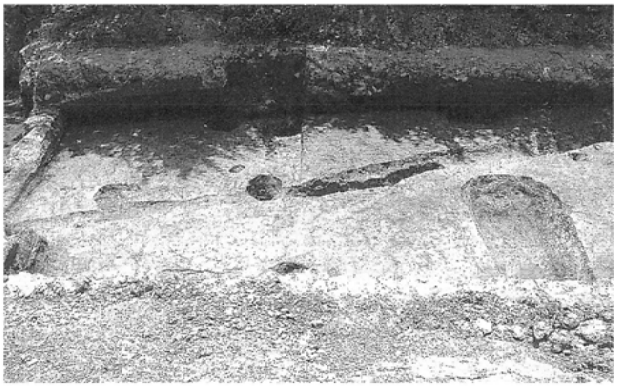
ＳＤ98検出状況(北から)



ＳＤ98完掘状況(南から)



ＳＤ98・ＳＤ201・ＳＤ202検出状況(北から)

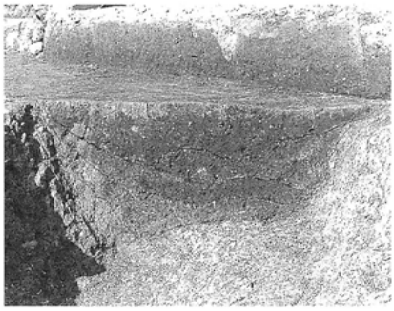


ＳＤ98・ＳＤ201・ＳＤ202完掘状況(北から)

図版 6

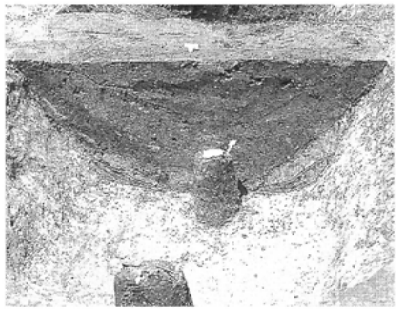
ＳＤ98土層断面第７図ｅ－ｅ′（南から）

ＳＤ98土層断面第７図ｆ－ｆ′（南から）

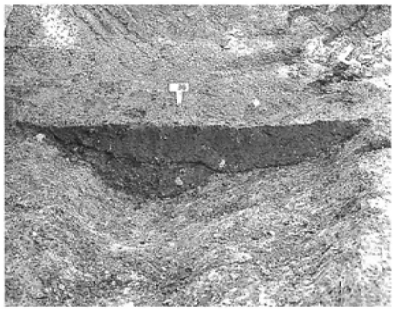


ＳＤ98土層断面第７図ｇ－ｇ′（南から）

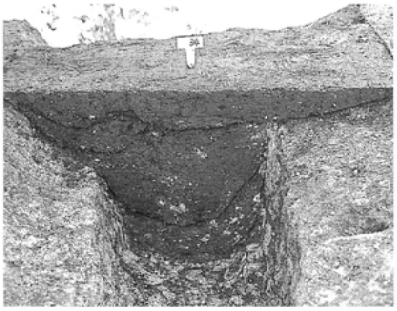
ＳＤ98土層断面第７図ｈ－ｈ′（北から）



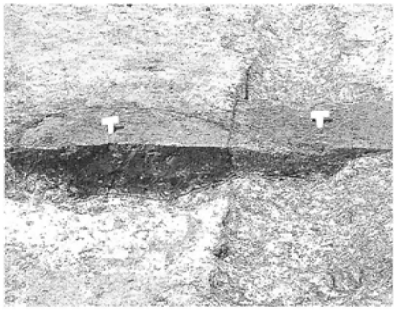
ＳＤ98土層断面第７図ｉ－ｉ′（南から）



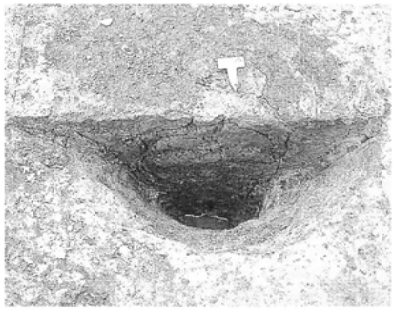
ＳＤ201土層断面第７図ｋ－ｋ′（東から）



ＳＤ201土層断面第７図ｌ－ｌ′（東から）



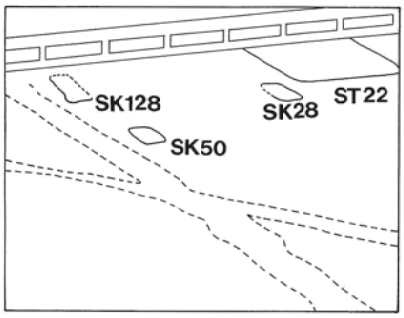
ＳＰ207・ＳＤ201土層断面第７図ｍ－ｍ′（東から）



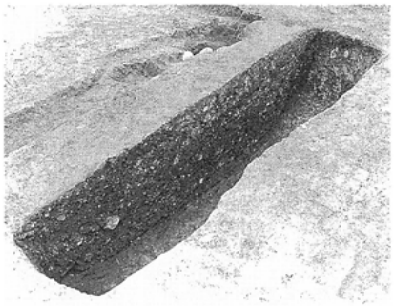
ＳＤ201・ＳＰ205土層断面第７図ｎ－ｎ′（西から）

道路状遺構断ち割り断面第７図ｂ－ｂ′（南西から）

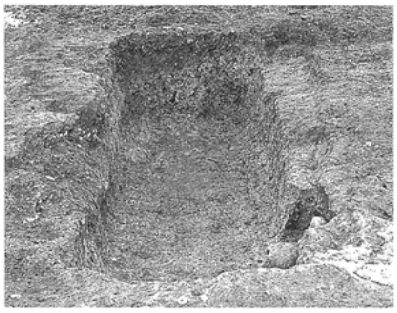
ＳＫ28・50・128土壙他検出状況（北東から）



左写真模式図

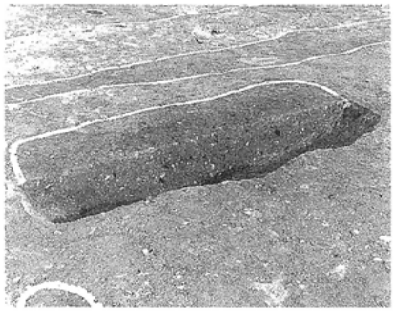


ＳＫ28土壙断面（南西から）

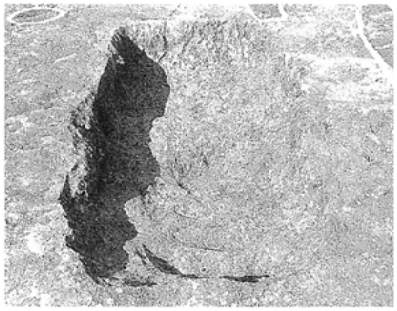


ＳＫ28土壙完掘状況（南から）

ＳＫ128土壙完掘状況（南から）

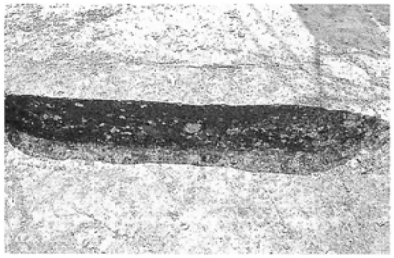


ＳＫ50土壙断面（北西から）



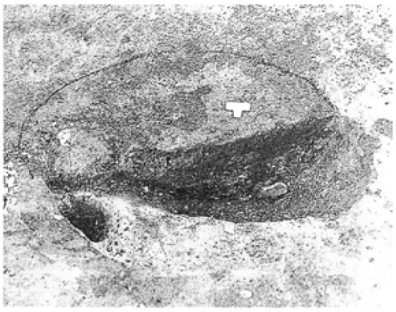
ＳＫ50土壙完掘状況（南から）

ＳＫ208土壙検出状況（南から）



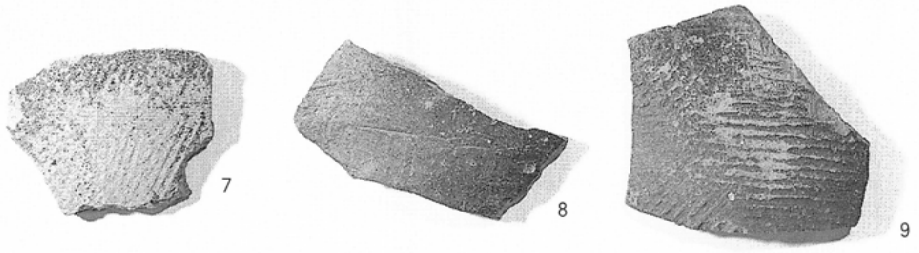
ＳＫ208土壙断面（西から）

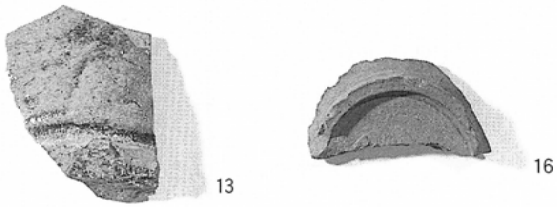
ＳＫ208土壙完掘状況（南から）

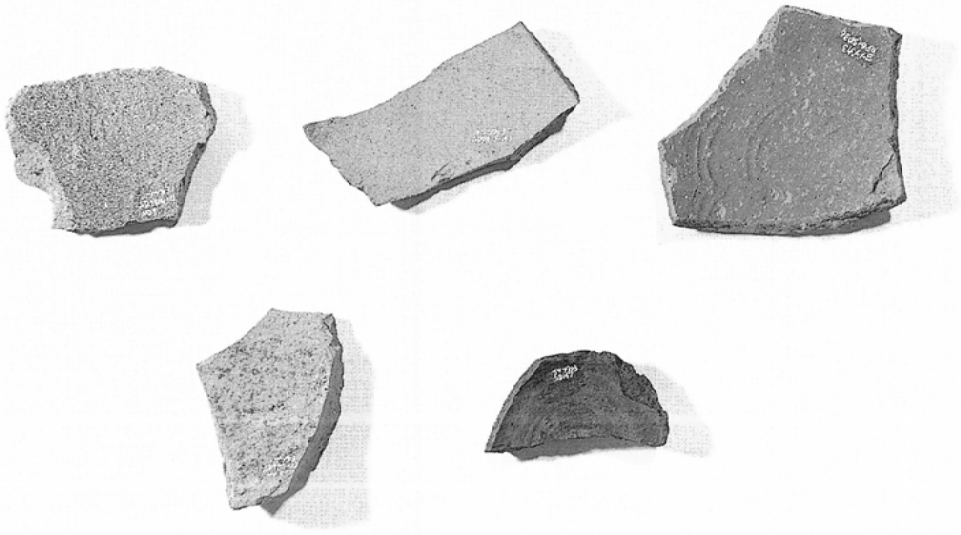


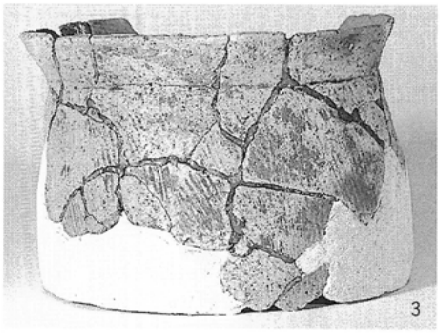
ＳＫ157土壙断面（南西から）

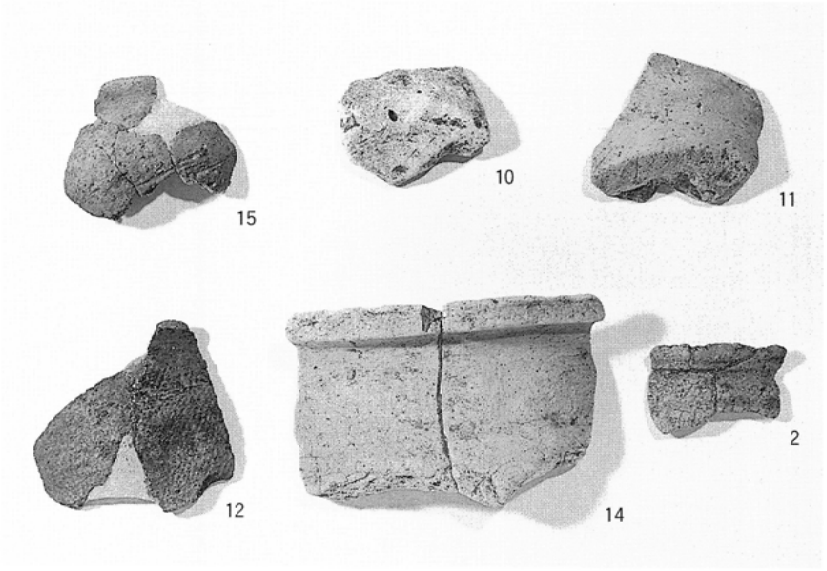
図版 8

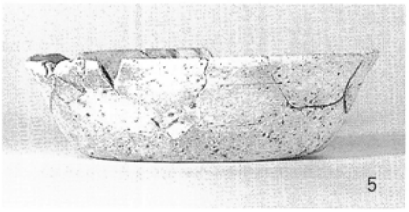


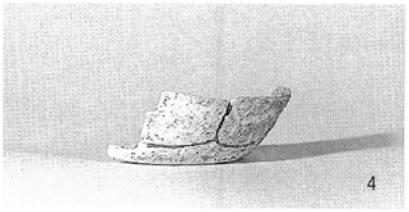


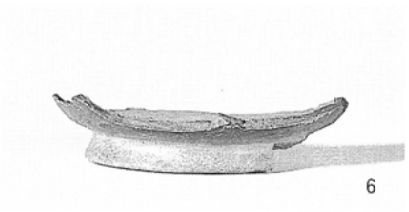



3


15
10
11
12
14
2


5


4


6

付　　編

四ツ塚遺跡から出土した骨の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

四ツ塚遺跡（山形県西村山郡河北町大字吉田字馬場所在）は、寒河江川と法師川に挟まれた緩やかな斜面状に立地する。奈良・平安時代の集落を中心とした遺跡で、多くの遺構・遺物が検出されている。今回は、時期不明の土坑から検出された骨の種類を知るために、同定を実施する。

1　試料

試料は、３次調査北側調査区東端付近に位置するＳＫ157覆土から検出された、長さ約９㎝の骨片１点である。他に遺物を伴わないため、所属時期は不明である。

2　分析方法

骨表面に付着した土を筆により除去し、肉眼により種と部位の同定をおこなう。なお、同定は慈恵医科大学の竹内修二先生にお願いした。

3　結果

同定の結果、直線的で長さがあることから、四肢の長骨の骨体である。間接部分の欠損と被熱による変形のため特徴が失われていて、種同定は不可能である。緻密質の厚さと大きさから、中～大型の哺乳類と考えられる。もしヒトであるとすれば、断面の形態から上腕骨のあるいは脛骨の一部と考えられる。

骨の外表面は白色を呈し、長軸に直行する方向の湾曲したひび割れが複数見られる。また、部分的に膨らみ・反り等の変形が見られ、全体的に収縮している可能性もある。これらの特徴から、当試料は有機成分が残った状態で、900℃以上の高温で焼かれた可能性がある（アンドリュー・チェンバレン，1997）。

4　考察

ＳＫ157の覆土より検出された骨片は、中～大型哺乳類の四肢骨の一部であり、比較的高温で焼かれた焼骨である。この骨の性格については、周囲の遺構・遺物の状況とあわせて考える必要がある。周囲に火葬施設などの存在が確認できるようであれば、そのような場所から混入した火葬人骨の一部である可能性も生じる。

引用文献

アンドリュー・チェンバレン（1997）「大英博物館双書　古代を解き明かす①　ヒトの考古学」，堀江　保範訳，學藝書林.

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第90集

四ツ塚（よつづか）遺跡第３次発掘調査報告書

2001年３月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161
山形県上山市弁天二丁目15番１号
☎023－672－5301
印刷　大場印刷株式会社